目が覚めたらのび太になっていた

厨二王子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

のび太に憑依してしまったオリ主。何故、ドラえもんの世界でのび太なんだと頭を抱えるが彼はドラえもんのある秘密道具に目を付ける。

「のび太って最高!!」

行きたいが行けなかった世界があるのならその世界に行けばいい。

彼の記憶こそがその世界に行く鍵だった。

彼は何度も受話器を取る。

目次

新のび太誕生
目が覚めたらのび太になっていた
1
新のび太の一日 ―― 7
秘密道具……そして旅立ち ―― 16
新のび太のガンダムＯＯ
ソレスタルビーイング ―― 24
ガンダム ―― 29
祝杯 ―― 36
予期せぬ出会い ―― 42
理由 ―― 47
陽動 ―― 52
広がる波紋 ―― 57
ガンダム鹵確作戦 ―― 62
トリニティ ―― 66
教授確保 ―― 71
残骸 ―― 77
うまい飯 ―― 82
家族 ―― 86
受けた傷 ―― 92
時間稼ぎ ―― 98
結成 ―― 104
ウェイトレス ―― 112
出撃 ―― 117

新のび太誕生

目が覚めたらのび太になっていた

「いてぇ」

突然、頭部が痛み目を覚ます。そこには自分よりオレンジ色の服を着た大きな男とその人物の隣に小物臭を漂わせている小柄の男が俺を見て笑っていた。

どんな状況だ、これ？

しかし、この二人どこかで見た覚えがある。

俺は事態が把握出来ずに混乱している中、大きな男が俺に近付いて胸ぐらを掴んできた。

「やい、のび太。漫画を返してくれなんて生意気なことを言いやがって。あれはもう俺の物なんだよ、次に同じことを言ってみろ、容赦しないからな！」

「そうだ、そうだ！」

その後、大きな男は俺を解放すると隣のやつと共に笑いながらこの場から離れていく。

頭が痛かったのはこいつに殴られたからなのだろうか？

……よし、よく分からないがとりあえずここまでの経緯を思い出してみよう。
俺はゆっくりと自分の記憶を辿っていく。確か昨日は大学はなく休みで一日中ゴロゴロしていたはずだ。ラノベを読んだり、エロゲをやったり。あっ、アニメも見たな。
しかし思い出せば思い出すほど普段と変わらない生活だった。
ダメだ。特に変わったことは思い出せん。
しかし記憶を掘り返すことで、他の記憶も思い出してきた。先程のオレンジの服を着た大きな男、その隣にいた小物臭い男ってまさか……。
俺は慌てて周囲を確認した。
「この空き地は……確定だな」
ふと下を見ると水溜まりがあり、そこに顔を覗き込む。そこには自分の顔ではなく、別の人の顔があった。丸い眼鏡にぱっとしない顔、黄色い地味な服に紺いろの短パン。もうお分かりだろう、あの国民的アニメの主人公。
おいおい、マジか！
「何でのび太になっているんだ……」
目を覚ますと俺はのび太になっていた。

「これからどうしようか」

向こうの俺はどうなったとか、のび太の意識はどこいったとか色々あるが、このままここで立ち止まっている訳にはいかないだろう。俺はこれからのことを考えながらぶらぶらと町を歩き始めた。

「まず、ここはドラえもんの世界で間違いない」

特に死んだ記憶はないが、どいう訳かのび太に憑依してしまったらしい。特に死んだ記憶もないし、神様とやらに会った記憶はない。転生特典もないようだ。

しかし何故、憑依した先がドラえもんの世界なのだろうか。どうせなら、エロゲの世界やらポケモン、ハイスクールD×Dの世界とかにしてほしかった。ああ、エロゲの世界は抜きゲーな。ハードなのはお断り。

さてこの世界でのび太に憑依して得することといえばドラえもんの秘密道具を使って楽して人生を過ごすくらいだろう。そんな人生も楽しいだろうが、それでは元の世界とあまり変わらない生活を送ることになる。

それに加え何度も世界の危機を救わなくちゃいけない、こちら側にメリットがないのにだ。

……どうするか。

「んっ、ここは?」

気付けばあの見慣れたのび太の家の前に着いていた。この家の場所なんて俺は詳しく知っているはずはないんだけが、体は覚えているというところか。

体の方も最初は違和感を感じたが、歩いているうちに少しずつそれはなくなっていった。

俺は意を決して家の中に入っていく。玄関で靴を脱いで階段を上がっていこうとすると向かって左の部屋から声が聞こえてきた。

「のび太、おやつはあなたの部屋に用意してあるから手を洗って食べるのよ」

「はーい」

のび太っぽく返事をしてみたが、似ていただろうか。

俺は奥の洗面所で手を洗うと階段を静かに登っていく。この先には自分の部屋があり、そこにはあの国民的アニメの象徴である青いタヌキがいるかもしれない。正式には猫だけど。

しかし……

今思えば小さい頃によくあのロボットがいたらなぁ～とかよく考えたもんだ。形はどうあれそのロボットが目の前に現れる。そんなことを思うと緊張してくる。その他にものび太じゃないとばれるのではないかと不安も出てきた。

でも今さら引き返せない！

俺は襖を横にずらして部屋に入っていく。

……いた！

青く丸い顔に赤い鼻、胸に着いている半月の形をした白いポケット、独特な形状、まぎれもなくこいつは……

「ドラえもん……」

「どうしたんだい、のび太くん？」

ドラえもんは手に持っているどら焼きをかじりながら声の主である俺に反応する。声も見た目もアニメや漫画で見た通りである。

気付けば俺は無意識にドラえもんの頭を触っていた。

「……大丈夫かい？」

「はっ、ごめん。何でもないよ」

つるつるだった、それと硬い。実際にドラえもんが目の前に現れると触ってみたくなるな。

しかし、バカと言われているがそれでもこいつは２２世紀で生み出された猫型ロボット。長く話せば俺がのび太でないことに気付くかもしれない。そこで俺は考えてのび太らしく誤魔化せる方法を探す。

そして思い出す、のび太の代名詞。

それは……

「のび太くん。またお昼寝かい？」

「うん、お休み！」

寝ることである。のび太はしょっちゅう昼寝をしていたので変わった行動でもないし他の人と関わらずに済むので怪しまれない、さらに寝るふりをすればこの先の方針も考えることが出来る。

しかしここで俺に徐々に眠気が襲いかかる。

今は眠っていいよな。これからのことは夜に考えよう。

俺はドラえもんに起こされるまで目を閉じてそのまま意識を失った。

新のび太の一日

憑依してから次の日、小学校が始まった。どこでも行けばいいんだよと思ったが朝の時間は母さんが起こしてくれるし、登校している同じ小学生を辿って行くと目的に着くことが出来た。

問題は学年と教室だが、これは運よく学校で静香ちゃんを見つけることが出来て、彼女が入っていく教室が分かったのでなんとかなった。さすがの俺ものび太と静香ちゃんは同じ教室なのは知っていたからな。

次の問題は席。これは登校時間が遅かったからか皆それぞれの席に座っており、空いてる席が少なくなっていたがそれでもやっぱり分からない。

俺は恥を忍んで近くの男の子に声を掛けた。

「ごめん、僕の席どこだっけ？」

「えっ、のび太くんの席はそこじゃないか。昨日席替えしたばかりだろう。大丈夫かい？」

「ああ、そうだったね。ありがと」

俺は静かに席に座る。というかさっきの男の子は学校一の秀才である出木杉くんだった。もう名前からすごいよなこいつ。少し時間が経つと先生がやってくる。どうやら今日は一時間目から数学のテストだったそうで皆は必死に教科書とにらめっこしていた。

一時間目のテストが始まる中、俺は簡単な四則演算を解きながら、これからのことを考えていた。

あれから色々考えたがこれからの方針は見えて来ない。とりあえず、今日はドラえもんが未来に一日行っているそうなので押し入れにしまってあるスペアポケットをいじってみようと思っている。この世界での唯一の楽しみだからな。

そんなことを考えていると先生が俺の回答を覗いてくる。その後、彼の顔は驚きで染まった。

「のっ、ののびくん。これは!?」

「どうしました、先生?」

俺は当たり前でしょ、というような顔で先生に声を掛ける。いやー、やってみたかった。バカなのび太が突然頭がよくなるみたいなこと。そういえばのび太は作中でもテ

ストで１００点を取ったことがあったが、この先生はカンニングとか疑われなかったんだよなぁー、最初。まぁ結局、ドラえもんの道具だった訳だが……。それでもしっかりと生徒を信頼しているこの先生はいい先生だと伺える。

先生はテスト終了後、気分よくこの教室から去っていった。

放課後になると、生徒の皆はそれぞれの目的ののために下校を始める。俺も席から立ち上がり家に帰ろうとすると大きな男が俺に声を掛けてくる。ジャイアンだ。

「おい、のび太！これから俺のリサイタルをやるんだ、特別にお前も招待してやるよ！」

「……」

突然の事態に俺の思考が停止する。

ジャイアンの歌といえばあの周りの木々をも吹き飛ばす強力な物理攻撃だ。好奇心で実際に聞いてみたい気もするがせっかくの命だ。大事にしたい。俺はやんわりとことわろうとする。

「えっと、ごめん。今日は……」

「あはは。そうだろ、そうだろ。四時から開演だ。待ってるからな」

何故か行くことになってしまった。俺は暫くそこから動くことが出来なかった。

「もう少ししたらあの迷曲を聞くことになるのか……」
　俺はあの後、家に戻って自分の部屋の押し入れからスペアポケットを持ってお馴染みの空き地へと向かっていた。行く気などなかったのだが明日無駄に絡まれるのも面倒だったので仕方なく着たのだ。スペアポケットを持ってきたのは……耐えるためさ。

「あれ、のび太さん？」
「……静香ちゃん」
　俺の目の前に現れたのはのび太のヒロインでお馴染み静香ちゃんだ。憑依してから始めて話すので少し緊張してしまう。しかし今ののび太である俺が何気なくどこでもドアを開けば入浴中の静香ちゃんのところに繋がるのだろうか。思考回路から頭の中まで変わったから無理か。後で検証してみよう。
「のび太くんも剛田くんのお誘いに……」
「まぁね」

「……お互いに頑張りましょう」

「……うん」

静香ちゃんはこれから起こる悲劇のことを想像したのか暗い表情をしている。きっと俺も同じ表情をしていることだろう。

……帰りたい。

二人で空き地に向かうこと五分、やがて目的地に辿り着く。

しかし、そこにジャイアンの姿はなく小物臭が漂う男……スネ夫と後何人かのクラスメイトの姿があった。

何かあったのだろうか？

俺たちの姿を見るとスネ夫が慌ててこちらに駆け足でやってきて話し掛けてきた。

「大変だ、のび太。ジャイアンが！」

なにやら話しを聞き簡潔にまとめるとここでライブを開こうとしたジャイアンだったが、そこに中学生がここを使わせろとやってきて喧嘩になったという。最初はライブが中止になると喜んだスネ夫たちであったが頑固としてジャイアンツは退かず、そのまま中学生たちに連れていかれたらしい。

ジャイアンの自業自得やん。

俺はただそう思い自分には関係ないと帰ろうとするとここにいる全員の視線に気付

き思わず足が止まる。
　正確にはスネ夫と静香ちゃんだがドラえもんに頼んでなんとかしてくれ。そんな目をしているように見えた。
　もしのび太だったらこの時どんな行動をするだろうか。ジャイアンはあんな性格をしているがいいやつだということは俺でも知ってる。なんだかんだ皆が彼を慕っているのだ。のび太もきっと同じ気持ちだろう。
　……仕方ない。
　これはのび太ではないとバレないために仕方なく動くのだ。そう仕方なく。
　俺はポケットに入っているスペアポケットを確認する。秘密道具も試せるいい機会でもある。
　俺はジャイアンが連れていかれた方向へ走り出した。

「くそ……」
「おいおい、まだ立ち上がるか。こりねぇな」
「アニキ、こいつしつこいですぜ」
「はっ、あと何発か殴れば倒れるだろう」

「デカイ図体しやがって！」
「がっ」
痛みが体全体に響き地面に膝が着く。目の前の中学生たちは笑いながら俺を殴り続けた。
必死に抵抗しようとするが数の有利は変わらず状況は変わらないまま時間だけが過ぎていく。
しかし退くことは出来ない。俺はガキ大将だ、一番強いのだ。
意識が朦朧とする中、長く続いていた拳の嵐が止んだ。ふと、顔を上げるとそこには見慣れた弱虫の背中があった。
「ひどくやられているな。立てるか？」
「大丈夫に決まってるだろ。のび太の癖に生意気なんだよ！」
「そうかい。ならさっさと終わらせるぞ！」
俺は膝に鞭を打ち立ち上がると、親友と共に拳を振るった。

「そらよ！」
迫りくる拳にカウンターを合わせる。相手は俺の拳を受けると後ろにぶっ飛んで

いった。
無論、のび太にそんなことが出来る筋力など存在しない。これはドラえもんの秘密道具によるものだ。
スーパー手ぶくろ
これを付けることで今俺の筋力は前の倍以上になっている。
俺は止まることなく二人の中学生を戦闘不能にしていった。隣を見るとジャイアンも終わったようだ。
もう少し他の秘密道具も試してみたかったが、ただの中学生じゃこんなもんか。
俺は最後に中学生たち三人に忘れ草を使用して今回の出来事を忘れさせる。
ポケットの中を覗くと、案外どんな道具があるのか思い出すものだ。
さて、じゃあ家に帰って他の道具も試すとするか。
しかし、何かを忘れているような……。
俺は家がある方向に向いて進もうとすると後ろから俺の肩が大きな手に捕まれる。
振り向くとそこにはにっこりとしたジャイアンが立っていた。
「ありとう、のび太。さすがは心の友だ。今日は特等席で聞かせてやるよ！」
ジャイアンは止まることなく、俺を空き地まで連行していく。
やはり、この世界は嫌いだ。

俺は心の底からそう思った。

秘密道具……そして旅立ち

「くそ、ジャイアンめ。意外とやりおる」

ジャイアンのライブは予想通りというかなんというかそれはすごい歌声だった。こっそりとスペアポケットから出した高性能の耳栓を着けたのにも関わらず今でも耳が痛い。

俺はあのジャイアンのライブを乗り切った俺は自分の家に帰って来ていた。そのまま家に着くと時間は夜になっており、そのまま夕飯を食べてお風呂に入る。そして今俺は自分の部屋でスペアポケットと向かい合っていた。

「とりあえず、秘密道具はやっぱすげー」

あの中学生たちに秘密道具を初めて使ったが、やはりすごかった。もはやこの感想に尽きる。

ドラえもんの秘密道具は万能して頂点。できないことはないといっても過言ではない。もしかするとこの状況、のび太に憑依することはある意味最強の転生特典ではないだろうか。

しかし俺はこの世界で生きていくのは嫌である。平和なエロゲの抜きゲーの世界や

戦闘もので無双してみたかったよ。
でも秘密道具を使うのは楽しい。お馴染みの道具はもちろん、知らない道具であってもなんでも分析機でどんな道具か調べられる。思わず道具を使うのに夢中になってしまう。
ドラえもんは明日の昼まで戻らないし、時間を止める道具を使っているので時間も気にする必要はない。俺は秘密道具を調べるのに没頭していった。

「まさに基地といえる外見だな。物や人はないけど」
今俺は自分の部屋ではなく、とても大きな空間に立っていた。無論、ここは秘密道具を駆使して作った空間である。まぁナイヘヤドアで空間を作り、それをビッグライトで限りなく大きくした感じだ。他にも色々な道具を使って加工していった。
「いい感じに出来たな。トレーニング施設や温泉、それにプライベートルームなんて作りたい」
スペアポケットには秘密道具だけではなく、色々な物が入っている。ドラえもんが慌てる時にガラクタをいっぱい出していたが、有用なものもたくさん入っていた。普通に家具のようなものもあるので模様替えも楽ちん。

気付けば驚時機を使っていたのにも関わらず、時間がかなり経過していた。この空間も自分が望んだものになってきている。

「しかし、このままじゃ俺の部屋と直結してるから母さんが知らずに入ってくるかもしれないし。なんとか出来ないかな」

やっぱりこの空間に入れる方法は限りなく少なくしたいところだ。空間を切り離してどこでもドアのみで入れるようにしたいと思ったが、それはどこでもドアの欠点により出来ない。どこでもドアは次元を越えられないのだ。記録されている場所、１０光年の範囲など制限がある。

なかなかいいアイデアだと思ったのだが。

あーあ、もしもこのどこでもドアが次元を越えられたらなぁ。

……んっ、もしも。

俺はまだ手をつけてない秘密道具に目を付ける。スペアポケットから出すとそれは大きな電話ボックスだった。

そうだ、そうだよ。これがあったよ！

もしもボックス

ドラえもん曰く、あらゆる可能性があり、俺が思うに不可能を可能にする道具。

先程に考えたどこでもドアの改造。それだけではない。

さらに俺はこの憑依時からずっと思っていたことを思い出した。

「はっはっは、すごい、すごいぞこれは！こうしてはいられない」

俺はスペアポケットからノートとペンを取り出してノートにあることを書き込んでいく。

気がつけばノートは三冊も積み上がっていた。これからやろうとすることにはより多くの情報が必要になる。

俺が望んだ世界への移動

それを俺は実行しようとしていた。

もしもボックスは世界を改変するものではなく条件にあったパラレルワールドに使用者を移すものだ。可能性や条件が皆無では移動は不可能である。しかし、俺は知っている。この世界と同じく二次元上に数多くの世界が存在しているということを。そしてこの世界に前世の知識を持ってドラえもんの世界にいる俺の存在が他の世界の存在を証明している。

「さてまずは実験としてこのどこでもドアからだな。もしも俺が所有しているどこでも

ドアのみどんな遠い場所、世界からでもこの空間に繋げることができるなら」

俺は受話器を持ち言葉を放った。

チャリンと静かに音がなる。今この瞬間、この世界は俺が言った条件に合う世界に切り替わった。出来ないのならそれが出来る世界にシフトすればいい。俺が思い着いたもしもボックスの使い方の一つである。

俺はもしもボックスから出てどこでもドアを取り出す。扉を開けるとそこはイメージ通り俺の部屋になっていた。実験は成功である。俺は次に次元を切り離しす。これでここに来ることが出来るのはどこでもドアのみである。

……よし！

そうと決まれば後は今後の方針である。別に一つの世界に絞る必要もない。色々な世界に行けばいい。そして自分が本当に暮らして行きたいという世界を見つける。そして秘密道具全体になんらかの異常が出たときのためにこの世界のコンタクトをなくす訳には行かないのでこの空間を拠点にしよう。

さて、初めに向かう世界だが抜きゲーの世界で静かに暮らすというのも良かったが秘密道具がある今、戦闘ものでもやっていけるはずだ。ロボットなんかにも乗ってみたい。今の俺に出来ないことなんてないのだ！

後々、俺はこの選択を後悔する。間違いなく、この時の俺は調子に乗っていた。

「それにしても小学生の体は違和感があるな……よし」

前世では高校生だったのでやはり小学生では視点や身長で違和感を感じることがある。一日過ごしていくことで少し慣れて来たがそれでもやはり感じてしまう。

俺はスペアポケットから新たな秘密道具を出した。

タイム風呂敷

俺はタイム風呂敷を使い、１８歳の姿に変える。

「やっぱり、しっくりくるな」

年齢は１８歳に身長は１７０センチになり、坊主だった髪はしっかりと伸びて短めのロングヘアになっていた。向こうに行くことでやはり小学生では動きにくい部分もあるだろうし、この年齢が丁度いいだろう。

「さて、長旅の始まりだ」

俺は再びもしもボックスのドアを開く。そのまま中に入り受話器を取った。

「もしも……」

野比のび太

彼の名はあらゆる世界に広がることとなる。

最初は好きな世界に旅立ちたいという、小さな理由だったが、世界を移動していくうちにその在り方は変わって行く。それは一番最初に向かった世界から大きく変化した。

「紹介するわ。彼は野比のび太。この船の新しいクルーよ」
「よろしく！」
新しい世界、そして仲間

「完成した。これが君の専用機だ」
「これが……」
ついに手にした自身の専用機。

「……っ！」
「おらおら、どうした？ガンダムさんよぉ！」
「そらっ！」
燃え盛る戦場、止まることのない戦い。
そんな彼が行き着く先とは!?

ガンダムｏｏ編

彼は引き金を引く

新のび太のガンダムＯＯ
ソレスタルビーイング

「ここは……？」

「おお、目が覚めたか！」

俺は聞き覚えのない声を聞いて目を覚ます。回りを見てみるとそこは白い部屋で目の前には見覚えのない男性がいた。

俺は直ぐに自分の記憶を手繰りだす。俺は確かもしもボックスを使って転移したはず。

ガンダムＯＯの世界に……。

そうだ、転移に成功したのはいいが転移した場所がどこかの国の戦争地帯で俺は慌ててもしもボックスをしまって、歩いていたら衝撃でぶっ飛ばされて意識を失いかけていたところを彼らに拾われたんだっけ？

いきなり命の危機を感じたよ、うん。いや、俺の設定がいけなかったんだけどさ。

俺はもしもボックスでつけた設定はガンダムＯＯの世界へ、ソレスタルビーイングに戦場で拾われそのままヴェーダに選出、孤児院出身、配属されたら仕事は雑用全般とい

う設定だ。しかしこんな危ないコンタクトになるとは思わなかった。
もしもボックスの影響により、俺はここに来る前のことについて違和感を持たれないはずだから話し方とかはヘタなことを言わなければいいのは楽だな。
次に今後についてだが設定通りに暫くは艦の雑用として働くことにしている。理由はパイロットの技能の設定を作り、モビルスーツで無双でも良かったが、まずはこの世界についての情報が少ないので艦の雑用をしつつ情報を集めるのが最適からだと思ったからだ。それに加え、艦のメンバーとコミュニケーションを取るのにも適しているし。
「怪我も軽傷だったし、拾ってくれたロックオンには感謝するんだな」
「ロックオン？」
「ああ、この艦のパイロットさ。とりあえず皆がいるところまで来てもらいたいんだが……歩けるか？」
「大丈夫」
「そうか、なら着いて来てくれ」
俺は目の前の青年の後に続き部屋を出る。部屋を出るとテレビでみたことあるような機械で出来た道があった。恐らくここは彼らの組織の拠点で間違いないようだ。
目的の部屋まで歩いていると目の前の青年が話し掛けてくる。

「そういえば自己紹介してなかったな。俺の名前はラッセ。よろしくな、のび太」
「俺の名前……」
「ああ、ここは訳ありでな。悪いが調べさせてもらった」
「……」
ですよねぇ～。
分かっていたことだがやはり経歴から人体実験とまではいかないが色々調べられたようだ。俺は腰についているスペアポケットがあることを確認すると安堵の息を吐く。このスペアポケットもこういう時のために他の秘密道具を使って俺以外に使えない、感知できないようにしてあった。
とりあえずこの流れでいきなり殺されることはないだろう。もしもボックスで作った設定とはいえ不安はあるが。
しかしラッセにロックオンね。ガンダムのパイロットや焼け野原さんはなんとなく覚えいるがそれ以外の人のことや詳しい原作の流れなどは覚えていない。ノートに書き出したとはいえ、原作知識の穴はすごかった。
さらにラッセルからこの組織のことについても聞かされる。ここの組織の名前はソレスタルビーイング、目的は戦争根絶。まだあの放送前なので本格的に動き出していない原作前ののようだ。原作が始まる前までには色々と出来ることを増やしておきたい。

やがて目の前のラッセルの足が止まる。どうやら目的の部屋に着いたようだ。
「よし、ここだ。入ってくれ」
「……どうも」
「失礼します。例の彼を連れてきました！」
俺は扉の先の光景を見て、心の中で感嘆の声を上げる。そこは沢山のモニターがあり、部屋の真ん中には他とは違い一段と高い席がある。そしてその部屋にいる人達が俺に気づきこちらに向いた。その中でも優しげな男が俺に話し掛けてきた。
「おう、無事に目が覚めたようだな。安心したぜ」
「あなたは……」
「ロックオンだ。よろしくな」
「助けてくれたみたいでどうも……」
「なに、きにするな。当然のことをしただけさ」
とりあえず、助けてくれたお礼を告げる。しかし、あのロックオンが目の前にいると思うと感動するな。狙い打つぜぇを生で聞いてみたい。
すると、今度は二人の女性が近付いてきた。その内の一人が声を掛けてくる。
「初めまして。この艦の艦長を務めているスメラギよ。そして……」
「私は王留美といいます。突然だけど、のび太くん。良ければ私たちソレスタルビーイ

ングに入ってくださいませんか?」
　彼女が俺に手を差し出してくる。俺はこの誘いを断ることも出来ないし断る理由もない。俺は迷いなくその手を取った。
「野比のび太。あなたをソレスタルビーイングに歓迎します」
　俺はこの瞬間、ソレスタルビーイングの一員となった。

ガンダム

「おい、のび太。こっちの機材を頼む」
「はいー」
　無事にソレスタルビーイングに入団してから2ヶ月、俺は絶賛雑用に追われていた。やはりというべきか一番に雑用の仕事は整備班が多く、今行っている機材の運び込みが一番多かった。さらにその他の仕事も出来るようにシステム関連などのことも学んでいる最中である。
「イアン、持ってきたよ」
「おう。じゃあこっちにおいてくれ」
「なぁ、この機体って……」
「ああ、ガンダム。こいつはエクシアだ」
「……」
　ガンダムエクシア。確か刹那が乗る近接型の機体である。しかしさすがガンダム。かっこよさがすごい。なにより、ガンダムＯＯに出てくるガンダムですごいのは太陽炉でお馴染みＧＮドライブだろう。今後のために確保しておきたいものだ。なんとかな

らないものかな。
　俺が機材を運びながら一人考えているとイアンが次の指示を出してくる。話を聞くと、どうやらロックオンが俺を呼んでいるようだ。
「いつもの射撃場で待っているだそうだ」
「了解」
「それと今日のこっちの仕事は終わったから戻って来なくていいぞ」
「そうですか。お疲れさまです」
「そっちもな」
　俺は整備室を後にすると、ロックオンが待っている射撃場に向かう。そこで俺はガンダムマイスターたちについて思い出していた。ガンダムマイスターたちの中で一番仲がいいのはロックオンだ。頼れる兄貴分という感じでよく面倒を見てくれている。さらにアレルヤとも少し話したりするものだ。刹那とティエリアはやはりというべきか必要な時しか話さないような仲だ。
　俺は初めて彼らと顔を合わせた時を思い出す。
『紹介するわ、彼は野比のび太。新しいクルーよ』
『よろしく』
『『……』』

二人そろって無言だったからな。もはやさすがとしかいいようがなかった。でもティエリアはどこか俺を警戒していたような。……気のせいか。

まぁ今の二人以外の操縦士やオペレーターたちとはうまくやっているつもりである。雑用でパイロットたちよりこっちの方が仕事で関わることが多いからな。

そんなことを考えている間に目的地である射撃場に着く。そこから銃声の音が聞こえてくる。

「おう、来たかのび太」

「すまん、遅くなった」

「いいってことよ。それより特訓を始めようぜ」

俺は銃を持って構えると離れたところにある的に向かって狙い撃つ。さすがはのび太というべきか途中までは狙い通りに的に弾を当てていく。しかし俺はのび太であってのび太ではない。時間が経つごとに集中力がかけていく。やがて弾がはずれていった。

のび太としての射撃力はすごいものだが彼の体力、集中力はとてつもなくひどいものだった。

俺はそれらを克服するべくこの射撃の訓練の他に特訓を始めている。

「くそー」

「さすがのび太だな。だがまだまだ甘いぜ」
　ロックオンは息をするかのように俺が当てられなかった的に向かって弾を当てていく。
「まぁ、こんな感じだな」
「さすがロックオン」
「のび太は最後の方になると力むからな。それがなければ今より弾が当たるようになると思うぜ」
「……」
　のび太の体とはいえそんなにうまくはいかないらしい。もし本物ののび太だったらもっといい記録を出せただろうか。
「そんな難しい顔をするなよ。お前は筋があるぜ、俺が保証する」
「そりゃ、どうも」
「まぁ、そう簡単には抜かれる気はないけどな。だてにロックオンを名乗ってないぜ」
「なに直ぐに抜いてやるさ」
　なにかを掴めそうではあるが、やはりまだまだこの男は遠いところにいるようだ。
　パイロットではないがなにが起こるか分からないのがガンダムの世界。移動中に射殺される可能性だってある。

団長、銃撃、止まるんじゃ……うっ、頭が。

今なにやら思い出しかけたが……まぁいい。とにかく戦闘スキルは必須だろう。であればのび太の唯一の武器ともいえる射撃の精度は高めておかなくては。モビルスーツ戦でも使えるし。近接戦闘も覚えたいところだ。

「おっと。すまないな、のび太。どうやら呼び出しみたいだ」

「こっちは連絡ないみたいだから、パイロットだけかな」

「今日はここまでだな。悪いが射撃場の鍵は閉めていってくれ。もう誰も使わなそうだからな」

「了解」

ロックオンは射撃場を後にし、ブリーティングルームに向かう。俺もこの場所から離れようとしたとき、一通のメールが届く。

「……シエラからか」

プログラム関係はシエラから教えて貰っている。たまにフェルトも基本無口だが教えてくれることもあった。しかし彼女たちもわざわざ時間を作ってくれるのだ、感謝しなくてらならない。

少しでも技術力をつけるために秘密道具も何個か使ったりしたものだ。

そして肝心のメールの内容だが今あるプログラムをいじっているのだが手が足りな

いので来てほしいとのこと。特にこの後用事がない俺はシエラのいる艦の管理室へ向かった。

「来たきた。ごめんね、突然呼び出しちゃって」
「別に大丈夫だけど。俺に出来ることは限られてるぞ」
「大丈夫大丈夫。ちょっとここを見ていてほしくて。直ぐに終わらせるから」
「そういえば、フェルトは？」
「フェルトは別の場所からアクセスしてもらってるの。だからお願いね」
「了解」
　俺は目の前のコンピューターを起動して、すぐさまにプログラムをいじり始める。
　作業を始めてから一時間が経つと目の前の彼女は腕を上げて腰を伸ばした。
「終わったー！ありがとね、のび太。ねえ、そろそろ夕食の時間だし、お礼になにか奢ろうか？」
　時刻を見るともう夜の八時。確かに夕食の時間だった。
「じゃあ、お言葉に甘えて」
「決まりね。フェルトも呼びましょう」

この後、食堂でフェルトと合流した後、俺たちは食事をしてそのまま解散した。

「もうそろそろか……」

後、一週間で原作、ガンダムの武力介入と同時にイオリア・シュヘンベルグの放送が始まる。

しかしそんな中、二ヶ月という月日が過ぎても俺はまだこの世界の現状を把握することは出来ていなかった。

祝杯

「さてさてこれからどうなるんだっけな……」
「ほら、ボーッとしてないでこっちの荷物も運んでくれ！」
「了解っと」
　時は経ち原作通りにイオリアによる放送は行われソレスタルビーイングという名は世界に広がった。そして初めての作戦は無事に終了。もう少ししたらガンダムたちがここへ帰って来る。
　そんな中、俺はプトレマイオスで整備班と合流し物資の運び込みをしていた。しかし、力仕事は疲れるな。ちなみに筋力を上げるためスーパー手ぶくろはつけていない。
「お疲れ、のび太」
「リヒか。こんなところに珍しい」
「パイロットたちが帰ってきたら祝杯を上げるから皆を呼びに来たんだよ。準備も手伝ってほしいし」
「なるほど。直ぐに向かうよ」
「場所は端末に送っておいたから」

リヒが他の隊員に声を掛けるために離れていくのを見ると端末を確認し、祝杯をあげる場所へ向かう。ちなみにリヒは操縦士で本名はリヒテンダール・ツエーリというのだが、長いのでリヒと呼んでいる。

そして目的地に向かっているとお酒のビンを大切に抱えている我らが艦長を見つけた。

「なにしてるんですか、スメラギさん」

「のび太じゃない。あっこれはあげないわよ」

「俺はまだ未成年ですよ」

「あははは、そうだったわね」

俺は笑う艦長に溜め息を吐いていると彼女は思い出したように声を出した。

「そうだ、パイロットの訓練はどう?」

「……」

実はイオリアの放送の一週間前から俺はパイロットの訓練を始めていた。理由としては俺の射撃能力が認められたということと、予備のパイロットは多い方がいいということだろう。要するにウェーダからの指示だ。まだシミュレーターにしか乗ったことはないが、これが意外に難しい。

そして俺はようやく物の複製を可能にする秘密道具の組合せを発見した。バイバイ

ンとタイムふろしきだ。まず、バイバインで複製対象にかけ分裂したところにすぐさまタイムふろしきを両方に被せて時間を戻す。こうすることでバイバインをかける前まで対象物の時間を戻し機械にも悪影響を出すことなく複製することが出来る。大きいものはスモールライトを使うことで問題を解決できる。そして俺はこの方法を使いシミュレーターの複製に成功した。それを向こうの世界の例の空間に配置し、余力があるときに訓練をしてたりする。しかしそれでもモビルスーツを動かすのは難しかった。なにかうまい秘密道具はないものか。

後ガンダムの複製については基地で警備が厳重なのとエクシアの武装がまだセブンソードではないので複製はしていなかった。

「そうですね、まだ歩くのが精一杯なところです」

「まぁ、焦ることはないわ。あなたには他の仕事ともたっぷりあるしね」

「そうですね……」

「あっ、スメラギさんにのび太」

目的の部屋に着くとシエラがこちらに向かって手を振ってくる。

「のび太、こっちの準備手伝って！」

「はいはい」

この後、他の操縦士や整備士、ガンダムマイスターたちとも合流して盛り上がった。

「やあ、のび太」
「アレルヤ、お疲れ。すごい活躍だったらしいじゃん」
「正直、いい気分じゃないけどね」
　アレルヤと今回の作戦について話していく。やはり彼は恒久な平和のためとはいえ武力介入は否定的のようだった。しかし俺はそんな彼の優しい心は強い武器になると思っている。ティエリア辺りは相応しくないとか言うのだろうが。
「ところで仕事の方は慣れて来たかい。もう君が来てから暫く経つけど。今じゃパイロットの訓練も行ってるんだろ」
「スメラギさんにも言ったけどまだ歩くのが精一杯さ」
「そうか……なら今度僕の任務がないときに見てあげようか？」
「大丈夫だよ。せっかくの休暇の時くらい休んでおけって」
「構わないよ。のび太にはいつもサポートしてもらっているしね」
「じゃあ……」
　間違いなく激しくなっていくだろうソレスタルビーイングの武力介入。一刻も早くモビルスーツの操縦は一流とまではいかなくとも、それなりにはしておきたい。俺は一

人静かに決意を固めていた。

「ロックオン、少しいいか？」
「ティエリアか。どうした？」
「のび太について少し話がしたい」
「のび太について？」
　ティエリアがのび太について積極的に聞くなんて珍しい。
　俺は食事の手を止めてティエリアの方を向いた。
「あいつはよく働いているよ。最近はパイロットの訓練も始めたしな」
「そうじゃない。おかしいと思わないか？」
「おかしい？それは身元のことか、それとも別のことか。それならヴェーダも問題なしって　判断したんだろ」
「ああ。しかし彼が来たとき私は不思議と何も思わなかった。その後もウェーダを介して自分からも調べたが何もおかしなことはない」
「ならいいじゃねぇか。あいつの働きはお前も知ってるだろ」
「……そうだが」

ティエリアはなにやら納得できないというような顔でここから離れていく。
まったく、気難しいやつだ。
俺は静かにお酒をグラスに注いだ。

予期せぬ出会い

「あー、暑い。暑すぎる」
「ほら、こっちの荷物も持って」
「なぁ、俺は確か久し振りの休暇のはずだったんだが」
「……確かに、のび太は休暇で間違いない。というか私も帰りたい」
「じゃあ、なんで荷物持ちしてるんですかねぇ」
「両手に花なんだから文句言わない」
「両手に荷物だろ、これ」
アレルヤが独断で行動するなどハラハラすることもあったがソレスタルビーイングの活動は順調に進んでいた。
そんな中今俺はシエラ、フェルトと共にモラリアの町を回っている。確かにこの地には任務でやって来たが今は特に任務中という訳ではなく、買い物に付き合わされているだけだ。
モラリア共和国
ＡＥＵに所属するヨーロッパ南部に位置する国家であり、その国を支える企業の二割

がＰＭＣトラストという民間軍事会社が占めている。このＰＭＣトラストというのは簡単に言うと戦争をしているところに傭兵とかを貸し出して金儲けをしている企業だ。まさにソレスタルビーイングの天敵ともいえる。そんな企業がある国に俺はいるのだ。

……早く帰りたい。

「あっ、あの服可愛い。フェルト行きましょう！」

「待って……」

女性二人はまた気になるものでも見つけたのかお店の中に入って行った。俺は近くのベンチに腰をかけ、荷物を地面に置いてハンカチで汗を拭く。そんな時目の前に一枚の硬貨が転がってくる。俺は何気なくそれを拾い上げた。

「これは……」

「おう、わりいな兄ちゃん。それは俺のだ」

「そうです……か……」

俺は顔を上げると声を掛けてきた人物の顔を見て思わず言葉を失う。この国がモラリアという時点で出会う可能性を考えていたが、まさかこんなショッピングモールで会うことになろうとは。

俺は慌てて冷静を装い硬貨を男に渡した。

「ありがとな。しかしどうした？そんな驚いたような顔しちゃってよ」

「すいません。あまりにも知り合いに似ていたもので」
「そうかい、そうかい。しかし珍しいなこんな時期に日本人とは。観光かい？」
「ええ、そんなところです」
「しかし、こんなところに観光とはな。この国なんてソレスタルなんとかに狙われちまうかもしれないっていうのによ」
「ソレスタルビーイングですか……」
「そうそう。あいつらのせいでこの国も厄介なことになっているのさ。お前さんも早く平和な日本に帰ることをオススメするぜ」
「ご忠告どうも」
「おうよ。しかしお前さんさっきから体が震えているが風邪かい？」
「えっ……」
　言われて自身の体が震えていることに気づく俺は慌ててスペアポケットに手を突っ込んだ。
　男は薄い笑みを浮かべながらこちらに近づいて呟く。
「知った気になってはいるが何も知らない、お前さんそんな目をしてるな、この辺じゃ珍しい」
「……っ！」

男は俺の肩に手を置く。
「なに、取って食おうとしてるわけじゃねぇよ。ただ……」
「そんなんじゃ、いつか死ぬぜ」
男はその言葉を最後にこの場から去っていく。俺は茫然と立っていることしか出来なかった。
アリー・アル・サーシェス
ロックオン曰く、戦争を生み出す権化。
これが奴と俺のファーストコンタクトになった。

「聞いたわよ。のび太、途中で調子が悪くなったんだって？」
「ああ、スメラギさん。大丈夫です、だいぶよくなりましたから」
「そう……。明日は動いてもらうからしっかり寝なさいよ」
「了解」
ホテルの廊下でスメラギさんと別れると俺は用意された自室に向かう。俺はずっとサーシェスに言われたことを考えていた。
「ああ、俺は知らないことが多すぎる。それにまだ弱い」

それは俺自身がよく知っていることだ。でも、今さら止まれないし、逃げることも出来ない。

やることは決まってる、なら突き進むのみ。

もうソレスタルビーイングのメンバーとはただの画面の向こう側のキャラクターでも他人でもない。大切な仲間だ。彼らの思いにも応えたいとも思っている。

「強くならないと……」

俺は自室に着くと時間を止めてどこでもドアであの空間へ移動、そして特訓を始めた。

理由

先日、ついにソレスタルビーイングとモラリア共和国の紛争が始まった。モビルスーツでの人間での殺し合い、逃げ惑う人々。戦争根絶とはいえそこまでの道のりは長い。イオリアシュヘンベルグの思想。地球人類の意思を統一させ、いずれ巡り会う異星人との対話に備えるためというのは分かってはいるものの、見ていて辛いものがある。だがこの現実と向き合うことは俺にとって必要なことだ。これから続く長い旅の力になることだろう。

しかしこの世界にはソレスタルビーイングをよく思わない連中も存在する。そしてそいつらは無差別に人を巻き込み動き出した。

国際テロネットワーク

これによりテロリストたちは頻繁に拠点を移すので、こちらは特定出来ず、俺たちはまともに動けない状態にあった。今はエージェントたちの連絡待ちである。

俺を含めて宇宙にいる以外のメンバーは地上の拠点となっている無人島に集まっていた。皆の様子だがそれぞれ思うことがあるようだ。刹那はサーシェスとモビルスーツ越しだが対面きたようだし。そのこともあるのだろう。ロックオンに至ってはいつ

になく狙い撃つを連呼している。彼はテロで家族をなくしているので誰よりも感情が高まっているように感じた。

肝心の俺はやることもなく、今後のことでも考えながら海の周りをぶらぶらしていた。

ふと、森の先に歩いてガンダムが目に入る。

「ガンダムね……」

俺は昨日念願のガンダムの複製に成功した。例の空間にエクシア、キュリオス、ヴァーチェ、デュナメスと保管してある。あの空間で無事に動かすことにも成功したし、特に問題はなかった。その時、ふと思ったのがツインドライブのことだ。あれは確か相性がいいＧＮドライブであれば安定して動かすことができるのではないか。まったく同じＧＮドライブって相性いいのかもしれない。

ならばガンダムの複製が可能な今、他のガンダムもＧＮドライブ二つ持ちの後継機が作れるのではないか。しかし、秘密道具を使っても複製が限界だ。

……まぁ、とりあえず科学者からか。

「あぁー、いないかな。途中でいなくなっても原作を大きく改変することなく、ＧＮドライブに詳しい優秀な科学者とか」

……んっ。そういえば早期に退場した科学者がいたな。

あっ、エイフマン教授！

しかしあの人が潔くついて来てくれるだろうか。いや、安全にＧＮドライブを研究できる環境や秘密道具を交渉材料にすれば協力してくれるかもしれない。そうなるとスローネたちの出現の情報は早急に必要になってくるな。確か彼らの奇襲で殺されたはずだし。

俺は今後について考えながら歩いていると、ピンク色の髪をなびかせてどこか遠いところを見つめている少女を見つける。

「フェルト？」

「……のび太」

『のび太、のび太、のび太』

「おっ、ハロも一緒か。まぁ眠れなくてね」

「……私も。のび太はさ、今回のことどう思ってる？」

「テロね……」

自分たちがやっていることが原因で間接的に人が無差別に死んでいく。それもテロリストという頭がおかしな連中によって。この胸に抱く感情。まだ俺は人を殺したことはないがこんな感情を抱くのだろうか。怒り、憎しみ、悲しみとは違うなにかを……。

この組織にいる、さらに旅を続ける上で恐らく絶対に通る道。俺は拳を強く握りしめ

た。
「それはあるさ」
「……そう。これからもこういうことがあるんだろうね」
「ああ。でもうまいくさ。俺が保証しよう！」
「のび太が言うと説得力ない……」
『のび太カッコ悪い、のび太カッコ悪い』
「うるせぇ！」
　何かを成し遂げることにはかならずそれに反発が起きるもの。しかしこういうことが起こるのは世界に対してソレスタルビーイングという組織が大きなものになっているという証拠でもあった。

「そら！」
　向こうの時間を止めて、例の空間でいつものように訓練を始める。モビルスーツの操作は一般兵よりは強くなったといったところだろうか。
　秘密道具を使い成長速度を上げているのでこのままいけば年内にはプロパイロット

並みの操作技術を向上できるはずだ。操作している機体はもちろん射撃に特化したデュナメスを使用している。もちろん他のガンダムも試したがやはりデュナメスが一番使いやすく感じた。例の後継機はデュナメス主軸で決定だな。

「おっと」

俺はうまくシールドを使いビームを防ぎ、すぐさま反撃する。しかし今は軽く引くことができる引き金を俺は現実で引くことが出来るだろうか。

『そんなんじゃ……いつか死ぬぜぇ』

「……はっ、死んでたまるかよ」

平和な抜きゲーの世界を選ばずにやってきたこの世界。この世界で得たものはとても大きい。なにより大切な仲間たちがいる。

「後悔はしていない!!」

のび太は仲間たちのために世界を平和にする。俺は結局、のび太らしい理由で戦っていることに気づき静かに笑みを浮かべた。

陽動

例のテロの騒ぎはエクシアとデュナメスが見事に解決してくれてあれから時間が経ち俺たち地上組は宇宙へと帰還していた。現在、ガンダムの卓逸した戦闘能力によって紛争の縮小に成功出来ているが、各国の武力の反発は収まることを知らないでいる。俺もとくになにもアクションを起こしていないので特に原作と違う流れにはなっていない……なっていないはず。

それよりも今プレイマイオスでは大騒ぎになっていた。

「出撃命令だ！デュナメスの状態はどうなってる!?」
「急ピッチでなんとか」
「わかった……のび太悪いが管制室へ向かってくれ。こっちはもう大丈夫だからな」
「了解」

俺はイアンに見送られスメラギさんたちがいる管制室へ向かう。詳しく事情は分からないがどうやら敵にここを探知されたようだ。

駆け足で管制室に向かうと皆がいつもの配置でそれぞれの役割をこなしていた。俺

も慌てて自分の席に座る。
「のび太、システムのプロテクトをお願い」
「大丈夫ですけど、そこまで厳重なやつはかけられないですよ」
「構わないわ。その変わりに出来る限り重ねて」
「了解」
「こっちが終わったら私もそっちの作業に移れるからそれまで持ちこたえて！」
「頼む」
シエラが合流するまで持ちこたえることくらい俺にでも出来るはず。俺はなるべく早く質もよくプロテクトを施していく。使えそうなものは即時に出来る限りの修正する。
やがてキュリオスとヴァーチェはそれぞれのポイントへ向かう。次に我らが戦術予報士の状況説明が始まる。向こうは艦が三隻とこちらはガンダムが四機という戦力。こちらは陽動にキュリオスとヴァーチェを出し挟みうちにしようとしたが向こうはさらに陽動をかけれた。これによりキュリオスとヴァーチェはその陽動に時間かけなければならなくなる。そして二機がこちらに戻ってくるまでの六分、その間一気に敵の波状攻撃が来るとのこと。相手は昔の戦いでもこの戦術を使ってきたので覚えがあったそうだ。指揮官は有名なロシアのアラグマであるセルゲイ・スミルノフ。

……となると。
「こちらの守りが……」
「でもエクシアとデュナメスで迎撃するしかない
『エクシア迎撃体制で出撃、デュナメスはプレイマイオスで射撃状態での待機をお願いします』
「プレイマイオス防御状態へ移行、通常電源をオフにする」
「耐えるのみ……か」
「戦うの？この船武装ないのに！」
「ガンダムがいますよ！」
「二機だけじゃない！」
「スメラギさん、前方に敵艦が！」
「デュナメス狙撃を開始して！」
『了解、狙い撃つぜぇ!!』
こうして六分間の短いようで長い防衛戦が幕を開けた。

「すごい衝撃！」
「スメラギさん、後何分ですか!?」
「後三分よ！」
ちくしょう、まだ半分か。
こちらはエクシアとデュナメスが問題ない状態で出撃できたとはいえ、向こうは作戦がうまくはまりかなりの数が攻めてきている。それにより迎撃しきれない流れ弾も跳んでくるわけで……。
「プレイマイオス、Ａ　区画、Ｂ区画が損傷」
「スメラギさん、大変です！エンジン下部が損傷、このままじゃ！」
「くっ……」
このまま耐えきれる可能性もあるが、正直デリケートな部分だ。
……仕方ない。
俺は懐に仕込ませておいたタンマウォッチを使用。タイム風呂敷を持ちながら席を立ち、損傷しているエンジンへ向かった。
「くそ、よりにもよって外側とは！」
損傷箇所が宇宙の面だったのでテキオー灯も一応使い、ロープをうまく使って損傷箇所にタイム風呂敷を被せる。

これで修復完了。
俺は急いで管制室へ向かい自分の席に何気ない顔で座る。そしてタンマウォッチを解いた。
「あれ？」
シエラは一瞬首を傾げるが、続けざまに来る衝撃を受けてエンジンのことについて突っ込むことはなかった。このまま忘れてくれるといいのだが……。
そして俺が修理してから数分後、敵の突然の撤退。そしてガンダムたちも無事に帰還。しかし、ヴァーチェのナドレを敵にさらしてしまうことに対してティエリアは一人怒っていた。

広がる波紋

人革連の襲撃後、色々なことがあった。

アレルヤの提案によりキュリオスとヴァーチェによる人革連のスペースコロニーにある超兵の開発施設の破壊が行われた。まぁ俺はいつものシステムの管理で役目を終えたが作戦は無事に終了して施設は破壊される。

さらに数日後、アザディスタン王国で保守派の代表であるラスード・ラフマディが何者かに拉致されクーデーターが発生。そのまま紛争が勃発した。エクシアとデュナメスが現地で動く。そして刹那がラスードを保護。そのままエクシアに乗った刹那が王女にラスードを届け紛争を一時的に止めるなど。

まったく、この組織にいるとこの世界の闇を知ることができるものだ。

そして今俺はなにをしているかというと……。

「連帯感ゼロね」

「マイスターたちはバラバラに動いてますからねぇ」

「……プールなんだからお前ら泳いだらどうだ？」

今俺たちソレスタルビーイングの姿は地上にあった。一部のメンバーは宇宙にある

プトレマイオスに残っているが。さらに俺はスメラギさん、操縦士やオペレーターたちと共に王留美の別荘のプールのんびりしていた。ガンダムマイスターたちはそれぞれ別々の行動をとっている。

「しかしこの後どうしようかなぁ。そうだ、のび太買い物……」

「リヒ、後はまかせた！」

「ちょっと、のび太！」

俺はすぐさまタオルを持ってここから離れる。後ろでなにやら騒いでいるが俺はとくに目的地を決めず歩き出し誰もいないところで例の空間に向かった。

「後、三機」

迫り来るフラッグをビームライフル一機一機打ち落としていく。例の空間に戻った後、俺はシュミレーターでモビルスーツの訓練を行っていた。機体はデュナメス。射撃しつつ他への動作がやはり少し遅れる。雑魚兵ならなんとかなるがプロのパイロット相手には通用しないだろう。さらに近接戦闘。これももともとセンスがないせいか一般レベルまで引き上げるのにも地味に苦労したものだ。

「くっ」

フラッグ三機が同時にこちらに向かってくる。敵の動きに反応が遅れた俺は腰についたビームサーベルを抜く。しかし、連続の攻撃の隙をつけなかった俺はカウンターをくらい中破にされていしまう。

「くそ」

俺は慌ててその場を離れて狙撃し三機を打ち落とした。このように複数相手の時もぼろが出るときがある。

「もっと早く!」

俺は次の日のスメラギさんの連絡が来るまでこの空間で活動していた。

俺はスメラギさんのお呼びだしメールで指定された場所へ向かう。部屋に入るとそこにはこの別荘にいるメンバーが集まっていた。どうやら俺が最後のようだ。そしてティエリアが睨んでくる。

「来たわね、のび太」

「遅いぞ、のび太」

「……すまない、ティエリア」

ティエリアには何言っても怒ると思うので適当に謝っておく。怖い怖い。

「まぁまぁ。とりあえず、話を始めるわね。ユニオン、人革連、ＡＥＵが合同軍事演習を行うことがわかったわ。」
「それは……」
普通では考えられない仲が悪い三陣営の協力。これはまさしくソレスタルビーイングによる影響によるものだろう。
そしてスメラギさんやティエリアは人革連による牽制ではなくなにかあると踏んでいるようだ。
まぁ、向こうは紛争覚悟でガンダム捕獲する気満々のやつとかいるからなぁ。
しかも原作通りならここで奴らも現れる。俺も動かなくてはいけない可能性出てきた。
俺は思考を巡らせていると、突然後ろから肩を捕まれる。振り向くと笑顔でいるシエラの姿が目に入った。
「の～び～太～」
「ちょま」
ふとリヒやラッセを見てみるとラッセがリヒの肩を叩いていた。こっちすら見ていない。スメラギさんはなんか笑ってるし。ティエリアはもう退出していた。
……これは無理だな。

俺はこうしてシエラによって買い物の荷物持ちに連れていかれた。無論、フェルトもこっそり去ろうとしていたが俺が捕まえた。慈悲はない。

そして後日、テレビ放送で軍事演習開始についての放送が始まる。それぞれのガンダムマイスターたちも動き出していった。

ガンダム鹵確作戦

　ついに合同軍事演習という名のガンダム鹵確作戦が始まった。別荘にいる皆の不安が強くなるなかミッションはＢ２へ移行、エクシアとヴァーチェが動き出す。
「スメラギさん、作戦に変更はなくて良かったんですか」
「問題ないわ。私たちに出来ることは彼らがやることを終えてここに離脱するのを待つことだけよ」
「了解」
　そうはいうものの、やはり不安には感じているのだろう。敵は千機近いモビルスーツだ。
　俺が考えているとシエラが声を掛けてきた。
「のび太。この戦いどうなると思う？」
「スメラギさんも言ってたけど、長い戦い、攻撃が来るだろうからな。正直、厳しいだろう」
「そう……待つしかないんだね」
「ああ」

確かこの戦いでは奴らが現れる。
ガンダムスローネ
ソレスタルビーイングが所有しているガンダムとは違い、疑似太陽炉になっているガンダム。
いわゆる、偽物。基本、そのままの状態ではトランザムが出来ないようになっている。そしてトリニティの三人が。
スローネシリーズは疑似太陽炉とはいえやはり欲しいところ。まぁ、これは彼らがソレスタルビーイングに来たときに複製すればいいだろう、それにちょっと細工もしようと思っている。後はエイフマン教授の救出に勧誘。これもタイミングはもう決めてあった。
最後に悩んでいることがあり、それはこの三人の扱いである。
生かすか、見殺すか
トリニティは原作でさんざんというほどヘイトを稼ぎ、そして散っていった。まぁリボンズの……というよりアレハンドロの思惑もあったのだが。ようは噛ませ、ソレスタルビーイングの引き立て役である。パイロットたちの腕も微妙、性格もあれだったし……。
普通であれば見殺すのがうまいやり方だと思うが最近、ソレスタルビーイングで活動

していると当たり前だが他で動きづらい。もしなにか原作にない異常があったときに対処がしにくいのだ。しかし、自身以外の駒があればそれを解決することができる。

秘密道具でコピー人形やふえるミラーでの自分のコピー、新たに人間を作るという手もあるが正直どれも微妙である。コピー人形や自分のコピーは俺であるという点でまず制御できない。それどころか俺が消される可能性があるのだ。さらに人間を製造するのも非人道的な部分が強く、これも暴走したときに止められる可能性が低いので却下。ということで暴走しても止められる彼らを率いれた方がいいと思ったのである。この世界以外で動くのにも使えると思うしな。人格の方は秘密道具でなんとかなるしな。後は説得の方法か……。

俺が今後について考えを深めていくと状況は変わらず夜になっていった。

ふむふむ、なるほど

皆が手と手を合わせてマイスターたちの無事を祈っている中、俺は現在のガンダムたちの様子をタイムテレビでこっそり観戦していた。無論、皆にはこのタイムテレビは見えていない。

今の目の前ではキュリオスが多数の人革連のモビルスーツに攻撃を受けている。

他のガンダムも大多数のモビルスーツ部隊に苦戦を強いられているようだ。
そして時間は過ぎて夜を明けて朝になる。
状況はこちらに傾くことはなく、それどころか悪くなってく。ガンダムたちが鹵確されそうになった時に三機の機体が現れる。色は違うが赤いＧＮ粒子を出すガンダムタイプだ。
……始まる
奴らによる民間人に対しての破壊活動、無差別殺人が。
後、ノートを見て思い出したが、ネーナが行った結婚式場のあれについても俺は動こうと思っている。あの事件がなければ後々楽になりそうだからな。
俺は一人これからのことについて気を引き締めた。

トリニティ

おっす、おらのび太！

いけない、いけない。なんかこれからのことを考えるとテンションがおかしくなっていた、戻さないと……。

さてあの戦いから数日、ついにプトレマイオスにトリニティの三人がやってきた。彼らがスメラギさんたちのところに向かう瞬間にタンマウォッチを発動し、即座にスローネシリーズを複製、さらに今後のために少し細工をさせてもらった。内容はその時が来るまで秘密ということで。

そして作業を終えた俺はいつも通りしれっと艦の制御室の自分の席に座っていた。目の前のモニターには刹那にキスするネーナの姿が映っている。

あら、だいたん……

しかしモニター越しとはいえこの三人を見れば見るほどあぁ～ってなる。俺はこいつらを仲間にしようしてるのか。まぁ、秘密道具を使えばなんとかなるんだけど。どうしようもないときは木こりの……おっといけないいけない。それはホントの最終手段だった。

俺が画面を見つめているとなにやらこちらを見つめている視線に気付く。
「じ～っ」
「あのー、どうしたシエラ？」
「やっぱりあの子嫌い！」
「おっ、のび太はあーいう子が好みか？」
「いや別に……」
ラッセがにやにやしながらからかってくる。
……なんかムカつくな。
俺はラッセにチョップしてダウンさせる。ラッセは腹を抑えてうずくまった。
「あれ、どこか行くの？」
「ああ、少しトイレに」
俺は席を立ちこの部屋から出る。俺はとりあえずトリニティたちが俺に対してなにかしらアクションをとるかを確認しておきたい。まぁ、ただの乗客員として見られてスルーされるだけだと思うが。
さっそく通路を歩いているとなにやらこちらに向かって元気よく歩いてくる女の子が歩いてきた。
ネーナ・トリニティ

恐らくトリニティたちの中で長く生き残ったがもっともヘイトを稼いだといっていい人物。というより彼らはデザインベビーでありまともな環境で育ってないのでこうなるのは仕方のない気もする。

後ネーナはヴェーダに接続することが出来たはず。ヴェーダといえば俺も秘密道具を駆使して接続することが出来た。もちろん慎重にことを進めたが。まぁ、閲覧しただけだけどね。

そんなことを思い出していると特に声を掛けることもなく俺は彼女とすれ違う。

すると……

「ねぇっ！」

聞き間違いかな。俺に声を掛けたような……。

「君だよ、君」

「俺？」

どうやら聞き間違いではないらしい。もしやリボンズのやつが俺になにかを感じたのか。ティエリアもなにかしら察していたし不思議でもない。

俺は警戒しながら彼女に近づいていく。

「そうそう。ねぇ、君もガンダムのパイロット？」

「いや、普通の乗組員だよ。雑用をやってる」

「雑用、君が？ふーん」
「なんで俺がパイロットだと思ったんだ？」
「別に、ただ私がそう感じただけ。ねぇねぇ名前はなんていうの？」
「野比のび太」
「……のび太？」
彼女はなにやら考える仕草を見せると再び俺を見て笑顔になる。
「さて、俺はもういっていいか？」
「ねぇのび太、この艦の中を案内してくれない？」
「……」
ここで断ってもいいが。なんか面倒くさそうなので案内を引受けることにした。
裏にいるリボンズが俺に対してなにかを感じとった可能性もまだあるし。これからの時のために顔を覚えてもらうだけでもいいだろう。
俺は探りを入れつつ適当に案内を始めた。

案内の結論から言おう。俺に対するあの反応はやはり彼女の勘だったようだ。まぁ俺もまだ特に動いてないしな。ただなんか気になるんだよなぁ。

タイムテレビ等でリボンズの動きをみようとも思ったが一期の動きってアレハンドロにくっついていたくらいしか知らないから見ても意味がないのでそういったことはしていない。

とりあえずこのことが知れたのと、ネーナの勘はあなどれないということを知れて良かったというべきか。

俺は自分の席に戻るべく制御室の扉を開ける。すると、中にはトリニティのことで頭を抱えているスメラギさんとなにやらにやついている操縦士たち面々、そして恐い笑みを浮かべているシエラの姿があった。

……これは面倒くさい匂いがするぜ！

案の定、俺は次の日に一日、彼女の買い物に付き合わされることになった。

教授確保

「おじゃましまーす。あっ、これ貰っておこう」

ソレスタルビーイングとトリニティの会談が終わり、トリニティたちが大気圏を突入するのを確認すると俺はユニオンのアメリカにある基地に向かった。そこに着くと俺は秘密道具で探知したある場所に向かう。無論、今の俺の姿は石ころぼうしととうめいマントで回りから見えないようになっている。

そしてこのユニオンの基地では突如こちらに向かってくるスローネたちにパニック状態にあった。そんな中、俺は途中でフラッグをぱくりながら目的の部屋に到着する。タンマウォッチを発動させると中に入っていった。

中に入るとそこには座っている教授の姿が。

「コピーにんぎょうっと。後、データはスルーで」

俺はコピーにんぎょうで教授と瓜二つのものを作り出して本物と同じ形で置いておく。動作スイッチは押してないので動かないようにしてあった。

教授のデータはのちのちユニオンやヴェーダに探知とか異常を感じられると面倒なためにスルー。当たり前だがこの部屋には教授しかいなかったことにしなくてはなら

ない。
　俺は騒がれても面倒なので教授を手刀して気絶させどこでもドアを展開。教授をあの空間に移動させた。
　俺も痕跡を残してないか確認するとどこでもドアの中へ入っていき、タンマウォッチを解除する。やがて部屋はスローネドライが放った赤いＧＮ粒子に包まれた。

「ここは……」
「お目覚めですか、教授」
「君は一体……」
「野比のび太と申します。教授、ぜひあなたの力をお借りしたい」
　長い長い俺の旅のために……ね
　俺は状況を理解して貰うべく、タイムテレビを用意し、教授に鑑賞してもらうことにした。

「なるほど……。君が誰であれまず感謝の言葉を述べるべきか」

「それはどうも。ではなにか聞きたいことはありませんか？」
「……君は何者かね。あのガンダムたちが襲撃に来てからわずかの間に私を連れ出すとは常識では考えられん」
「そうですね、そこから説明しましょうか。俺は異世界から来たんですよ、教授。故に異世界の技術を所持しています。教授の救出もその技術を複数使用して行いました」
「なんと……」
俺は教授が驚きを示すと同時に興味も示したことを見逃さない。さらに話を続ける。
「おや、興味を持って貰えた様子」
「そんな技術があるのであれば私を救う必要ななどなかったのではないかね？」
「どんな技術でも出来ないことはあるんですよ。俺が異世界を回る理由として技術の吸収というのもありましてね」
「なるほど」
「ではまずこちらをを見てください」
「この機体は……」
俺は奥のライトの電源を入れて、七機のモビルスーツを教授に見せた。
そう……ガンダムだ。
前にコピーしたエクシアたちに加えてスローネシリーズも追加してある。

「なぜ君がこれを」
「言ってなかったですが、俺はソレスタルビーイングに所属してましてね。これは隙を見て複製した機体です。しかしオリジナルとなにも変わりません」
「ソレスタルビーイング……」
「ええ。しかし向こうに俺については情報を明かしてはいません」
「複製は可能。そして私を必要とする理由か。なんとなく理解したよ」
「さすがは教授。そう作ってほしいのですよ、俺専用のガンダムをね」
「……時間がかかるぞ」
「時間なら無限に用意できます。人手もね」
「条件がある」
「聞きましょう」
　教授が提示した条件大きくは三つ。自身の命、意志の保証と、そして教え子ともいえるカタギリとスメラギさんの命、独自のＧＮドライブの研究だ。
　ふむふむ……。
　二つ目は予想外だったな。
「一つ目と二つ目はいいでしょう。しかし彼らの命は確実に保証できません」
「そこは見てくれるだけでもいい」

「そうですか……。まぁ、スメラギさんはソレスタルビーイングに所属してますのでなんとか。カタギリが難しいです」
「彼女はソレスタルビーイングの一員だったのか！」
　あっ、そういえばこの人知らなかったな。
　まぁ、教授が仲間になる以上、隠す必要もないのでばらすことにした。
「ええ我らの大事な戦術予報士です」
「ふっ、なるほど。どの軍も彼らを仕留められないわけだ」
　エイフマン教授は静かに教え子を思い微笑む。
「最後に聞きたい。君はソレスタルビーイングに所属してるといったが彼らの意志に順しているのだな？」
「はい。来るべき対話のために必要ですからね」
「そうか。やはりイオリア・シュヘンベルグは……」
　イオリア・シュヘンベルグの真の目的。来るべき対話に備えての人類の意志の統一。この目的が達成されたのにも関わらず実際の戦いではかなりの苦戦を強いられた。やはりこの目的の達成はこの世界にとって必要不可欠であろう。
　しかし、この感じ勧誘は成功かな。最後に俺は彼に問いかける。
「では教授。この俺に協力してくれますか？」

「……よかろう。全力で君の専用機の開発に取り組もう」
「ありがとうございます」
こうして俺に力強い科学者が味方に着くことになった。
レイフ・エイフマン教授
彼はこれからも数々の技術を取り入れ、多大な発明を生み出していくことになる。

残骸

「のび太君、ここは一体なんの部屋かね……」
「……」
エイフマンの前には無数の腕や足、血などの明らかに人間だったものが散らばっている。いつ見てもこの光景は来るものがある。
あえて彼には伝えてなかったが……無理か。
教授確保から数日前、俺は犯してしまったのだ。この世に開けてはいけない箱、触れてはいけないものがあるように秘密道具にも使ってはいけないものが存在した。
「水３５リットル、炭素２０ｋｇ、アンモニア４リットル、石灰１．５ｋｇ、リン８００ｇ、塩分２５０ｇ硝石１００ｇ、硫黄８０ｇ、フッ素７．５ｇ、鉄５ｇ、ケイ素３ｇ」
「それは……」
「結果は知っていても挑戦してみたくなってしまったんですねぇ～、これが」
そして使ってしまう、その結果はこれだ。
俺はある映像を教授に見せる。彼はそれを見て顔をしかめた。

ドラえもんの持つ道具で最も恐ろしいとも呼ばれる道具である人間製造機。本来、超能力者たちを作ってしまうこれを俺は材料をとあるアニメよりにしたり、別の道具を加えたりして新たに生物を作り出すことに成功。しかしそれは人間と呼べるものではなくおぞましい怪物を作り出してしまった。いや、最初は人間とも呼べただろう、しかし時間が経つにつれてこれは本性をさらし始める。変化があったのは感情、そして形状だ。

感情は制御不能とばかりの暴走ぶり、形状も人間から離れていきカマキリのような体になっていった。その瞬間、奴の眉間に銃弾を叩き込む。それを俺はただ形状が変わったものを何十、いや何百回と殺し続けた。

しかしそこ果てにあったのは目の前の死骸の山で決して真っ当な人間が生まれることではなかった。

ただ人手がほしい、一人はさみしい、そんな当たり前の感情から始めた作業だったんだが。

「禁忌ってやつに触れた結果ですね」

「しかし、得たものはあったのではないのかね？」

「ええ、その通り」

あのイノベイトですら改造人間である。本当に初めから作り出した人間というもの

はまともに出来たためしはない。
「故に作業用ロボットを使ってます」
「うむ。これらはよく指示を判断し、速やかに動いてくれる」
「はい、これで十分なんですよ。これでね……」
優秀な人材、個性がある人材はともかくそれ以外、始めから作る人間なんて正直このロボットで十分なのである。ちなみにこれはスペアポケットの中にあったのを発掘して複製したロボットだ。このロボットは人工知能ではなく他の面で優秀な性能を示している。
「でも認められなかったんですよ。あれが人間だなんて……だから」
俺は命は奪っても、人間の命はまだ奪ってない
「しかし目を背けてはいけない。これはどんなに小さな研究でも君がやったことなのだから」
「わかってますよ」
だからこそ、この部屋を残しているのだから。
俺はこの後も、教授を他の部屋へ案内した。

「うーむ、おいしいのだがなにか足りない」
「まぁ、秘密道具で出したものなんで。後は腕のいい料理人との違いということで。今度オススメの料理に連れてきますよ」
「ほう」
「まぁ土曜日しかやってないんで合わせなくちゃなりませんが」
俺と教授はこの空間の食堂で食事を取っていた。
食に関してだが俺は実はある異世界に向かったのだ。まぁあれをいけない異世界と大きくいえるかは分からないが。比較的安全に飯が食えるし、なにより美味しい。トリコの世界も一番に出てきたがあれは魔境だからな。力を付けていない今、とてもではないが行くきは起こらない。
それとこの空間についてだがいつまでも例の空間と呼ぶのも変なので名前をつけることにした。そう……
Nベースと名付けた。
……えっ、ダサい。そこは気にしない気にしない。
とりあえずこのNベースは今ここ食堂に加えて、シミュレーションルーム、戦闘演習場1、2、3、機体の保管庫、研究室、温泉、後は何個か個室があるという形になっている。

演習場は遮蔽物が少ない草原、水の中、宇宙空間というようなところになっていてかなり広く設計されていた。他の施設の増設は教授やこれから仲間になるであろうメンバーと話し合って決めていくつもりである。

「さてのび太君、揃えてもらいたいものがあるのだが」

「じゃあこちらに詳しく……」

着々と専用機について案が組上がっていく。完成するのがとても楽しみだ。

このようにこちら側は向こうで時間を止めて教授と話したり、訓練したりと充実な時間を過ごしていた。訓練の成果については近々に試すことになるだろう。

……実に楽しみだ。

俺は自然と浮かべる笑みを抑えることは出来なかった。

うまい飯

『食』

誰しもが求めるものであり、夢。異世界が転移できるとしたらやはりこれの追求は必須であろう。

俺はガンダムＯＯの世界にやってきて飯を食べてきたがおいしい物もあったがとてつもなくうまい物に出会うことはなかった。ドラえもんのグルメテーブルかけで出した料理があるが、確かにうまいんだけど人が作った物よりなにかが劣るんだよなぁ。なので俺は異世界にうまい飯を食うべく別の世界も転移したのだ。そして俺は今エイフマン教授と共に異世界の食堂にやってきていた。

「お気に召しましたか？」

「うむ。確かにうまい！」

「それは良かったです。しかしやっぱりうまい。ということで店主、おかわり！」

「はいよ」

店主は俺の言葉を聞くと厨房に戻り、料理を再び作り始める。

ここは異世界食堂と呼ばれる食堂、猫屋。ここで出される料理はどれも日本にある一

般の料理と種類はそう変わらないが、店主の腕がとてもよく俺の舌をうならせる。さらにうまい料理、食材といえばトリコの世界があがるだろうが、あの世界は危険がいっぱいなのでこの世界をチョイスしたのだ。後はケモミミやらエルフなどファンタジーな方たちと会えることが大きい。

「まぁ、今日はほかのお客さんは来てないみたいだけど」

「残念だ。ぜひ、見たかったのだが……」

「なに次来れば会えますよ」

俺はレモン水に口をつける。

さて俺が考えるのはこの後の行動についてだ。トリニティの動きは発信器をつけたので分かっている。結婚式の襲撃だがウェーダからの彼らへの指示とルートを改変して防がしてもらった。タイムテレビでそれは確認済み。しかしあくまで防いだのはその一件のみ。彼らの破壊活動は継続している。そんなトリニティの行動に異議を感じた刹那とティエリアはもうじき動き出すだろう。となればサーシェスが彼らを始末するのも時間の問題か……。

「そろそろうちのパイロットがトリニティに対して動く頃合いでしょう」

「確かにトリニティたちの行動は紛争根絶を掲げ動いているのだろうが、方向性がソレスタルビーイングとは違う。あのあからさまな破壊行動。まさか……」

「教授、いるんですよ、彼らを使ってイオリアの計画にうまく入り込もうとしている奴が」
「そんなことが……。しかし君のようなものならともなくまったく関係がないものが出来ることではないだろう」
「ええ。彼は自らを監視者と名乗ってます。問題はその後ろにいる奴なんですが」
「後ろ？」
「……この先の話はまた別の機会にしましょう」
　教授はまだイノベイトについては知らないはずなのでその辺のことを説明するのには時間がかかるので後にした方がいいだろう。
「それでトリニティについてはどうするかね。なんとなく彼らの最後は予想はつくが」
「こちら側に引き込もうと思います」
「本気かね？」
「ええ。人間性に問題がある人達ですがそこは考えがあります」
「君が言うのであれば特に思うところはないな」
「いいのですか？」
「どのみち、あのメッセージを見たときそちら側の誰かが私を殺しに来ることは確かだったからな」

「まぁ任せてください。……おっと料理が来たようだ」

俺の前に香ばしい香りを漂わせた一つの料理がやってくる。デミグラスソースの甘い香りが鼻をくすぐる。そう、皆が大好きハンバーグである。と同時に白く輝く白米もやってきた。

俺は口の中で唾液が溢れだすのを感じながら、手元に置いてあったナイフとフォークを取り、ハンバーグを切ってゆく。中を開くと肉汁がこれでもかといわんばかりに溢れてくる。俺はゆっくりと切ったそれを口に運んだ。

俺は特にうまいリアクションや感想をまだ述べることは出来ない。いずれは言えるようになるよう努力しよう。とりあえず、この一言。

うまい!!!!

口の中で広がるデミグラスソースとハンバーグハーモニー。絶妙な歯ごたえ。まさに至高の一品といえるだろう。うんうん。

俺と教授はこの後もデザートを頼んで食事を楽しんだのであった。

家族

繰り広げられたスローネたちとエクシア、ヴァーチェ、デュナメとの戦闘。しかしそれは向こうが引いたことで両者とも特に深い損傷はなく戦いは終わる。しかしそれは機体であってパイロットではない。

「うわぁ、ギスギスしてますねぇ」

「まぁ、仕方ないだろう。あれは……」

潔く戦闘開始からそうそうに引いていった彼らであったが彼らは大きな爆弾を残していった。まずはロックオンの家族が巻き込まれたテロ事件を起こしたＫＰＳＡに刹那が所属していたこと、そして彼らがウェーダのレベル７の情報を閲覧できるということだ。

「ティエリアさんもあれだし」

「まぁ、そのうちなんとかなるだろ」

「のび太は相変わらずだな」

俺はふと自分の探知機に反応を感じ、この場から離れる。リヒは自分の部屋に戻っていく。俺も時間を止めて前にトリニティたちの映像を出すと三人が彼らの基地で留美

たちと接触しているところが映し出していた。トリニティたちの動向の確認も怠らない。

そしてそろそろ大規模な戦闘が始まるはずだ。この艦の整備にも力をいれなくては。

時間を再び動かすとスメラギさんから連絡が来てシエラたちに合流するように指示がくる。俺は目的の場所に向かい歩き出した。

「あっ、きたきた」

「待たせた。それでどうすればいい？」

「私とフェルトはイアンの方にいくからクリスとここをお願い」

「了解」

スメラギさんはさらに細かい指示を出すと、フェルトと共にこの部屋から出ていく。

すると、シエラが話しかけてきた。

「聞いてよ、のび太。スメラギさんったらまたお酒飲んでたのよ」

「……ぶれないな」

そんなことをしていても予定通りに仕事を終わらせることのできるスメラギさんはさすがとしかいいようがない。

彼女は誰に言われてもお酒を飲むことをやめることはないだろう。
「さて、じゃあ俺も仕事するか」
「ああ、ファイルはこっちにあるからそこからとっていって」
「はいよ」
俺は黙々と作業を続ける。作業の最中は俺もシエラも集中しているので基本的に作業関係以外の会話は行わない。
作業が終わると気づけば一時間が過ぎていた。俺は思わず背筋を伸ばす。
「お疲れ」
「そっちもな」
「フェルトたちはまだ時間がかかるみたいだし、先に食事にしない？」
「そうだな。しかし宇宙にいると時間の感覚がおかしくなるときがあるから困る」
「それは確かに」
俺とシエラは食堂に向かって歩き出した。
「しかしのび太も随分とプログラミングの腕が上がったのね。教えたのは私だけどとても驚いちゃったよ」
「そうでもない。まだまだだよ」
「最近はパイロットの訓練もやってるし、もうとても雑用という域を越えてるよ」

「……そうでもない。俺はやれることを精一杯やるだけさ」
「すごいね、のび太は」
「……」
秘密道具を使って俺の技術の吸収力をあげたりしたがありのままを出しすぎたか。
俺はこれからのありかたについて考えようとするがシエラは話しを続ける。
「そういえばのび太は何でこの組織に入ろうと思ったの？」
「あの状況で入る以外の選択しはなかったしな。それに拾ってくれた恩というところか」
「あはは、そうだったね」
シエラは俺がこの組織に加わったときのことを思い出したのか苦笑いを浮かべる。
「そいうシエラはどうしてこの組織に入ったんだ？」
「私はね、家出してこの組織に入ったの」
「それは……」
この組織にいる人たちは皆大抵なにかしらの大きな理由があって所属している。それ故に珍しいと感じてしまった。
「でも、この世界を変えたいと思ってこの組織に入ったのは変わらないわ」
「やっぱり両親とはもう会ってないのか？」

「まぁね」
　恐らくこの組織のことだ、表向き事故死で消息不明みたいなことになっているんだろう。
　しかし、家出ね……。
「あっ、ごめん。のび太は孤児だったよね」
「大丈夫、気にしてないよ」
　思えば俺も似たようなものか。いや、それよりひどいな。こののび太に憑依する前の両親はともかく。のび太の両親やドラえもん、その友人などはもうこののび太という存在をなかったこととして認識している。これはもしもボックスや独裁スイッチをうまく使うことでこの状況を作り出した。さらに俺の持つスペアポケットもドラえもんが持つ四次元ポケットと切り離してある。恐らくドラえもんは自身の道具が全てなくなって驚いていることだろう。
　俺はあの世界の人間からのび太という存在を奪った。俺は俺が決めたやり方で生きていく。もう俺は止まることは出来ない。
「そういえばのび太はどうして私のことをシエラって呼ぶの？」
「えっ……まぁ、呼びやすいから？」
「もう最初にクリスでいいって言ってなかったっけ？」

まぁ、ほとんどの人を名前で呼んでいるのにその中でも親しい間柄の彼女を名前で呼ばないのは変か。

「分かったよ……クリス。これでいいか？」

「まったくもう……」

なにやら嬉しそうなクリスを横目に食堂にたどり着く。この後は相変わらず料理味は微妙だったがクリスとの食事を楽しんだ。

受けた傷

「デュナメスの被害が……」
「のび太、デュナメス優先でこちらに回収して。クリスティーナは周りの敵の気配の探知、フェルトは艦のシステムの維持をお願い！」
『了解』
　宇宙で行われたガンダムたちと連合軍のジンクスとの戦い。向こうはヴェーダのシステムを味方につけて疑似ＧＮドライブを装備。結果、こちらはプトレマイオスのバックアップを受けて完全な敗北は防ぐことができたが、ヴェーダから見捨てられたと思いボーッとしていたティエリアを庇い、ロックオンが重症をおってしまった。
　しかし、今回は介入するかものすごく悩んだ。
　出来ればまだ表舞台には出なくないということとアレハンドロとリボンズが注目しているし、それにティエリアを目覚めさせるにはこのロックオンの負傷は欠かせないと思ったからだ。
　もちろん、敵が追い討ちを仕掛けてくるのであれば介入するつもりだった。
　俺は急いでパッチの方のシステムをいじり始める。やがて作業がきりのいいところ

までいったところでスメラギさんが声をかけてきた。
「ありがとう、のび太。こっちは大丈夫だからイアンの方に行ってくれる？」
「分かりました」
俺は駆け足でイアンがいる部屋に向かった。

「予想以上ですね……」
「のび太。こっちの装甲はダメだ。向こうにいるやつらから新しいものを持ってきてくれるように頼んでくれ！」
「了解です」
俺はこの後もずっとデュナメスの修理を手伝いながらシステムの方も目を通していく。作業は暫く続きイアンに声を掛けられるまでそれは続いた。

自分の作業を終えた俺は治療を終えたロックオンが目を覚ましたと聞き彼がいる部屋に向かっている。部屋の前に着くと部屋からフェルトが暗い顔をしながら出てきた。

「フェルト」
「のび太……」
　フェルトは特に俺の名前を呼ぶだけで静かに去っていく。やはりロックオンの怪我はこたえたようだ。彼女のケアは俺よりもクリスの方が適任だろう。
　そして俺は部屋の中に入っていった。

「おう、のび太」
「聞いたよ、右目のこと」
「心配かけてわりぃな」
「……」
　ロックオンはいつも通りに笑い掛けてくる。こうして見ると俺の選択は正しかったか悩むときがある。いざという時はタイムふろしきで。
「これでも任務には出なきゃいけないからな」
「まったく、厳しいときは潔く引いてくれよ。もしものときは俺が代わりに乗るさ」
「はっ、そう簡単にデュナメスのパイロットの座を譲るかよ。もっと腕を磨いてから言うんだな」

「……それを言われると困るな」
「そうだ。ティエリアの様子を見てきてくれないか」
「ティエリアの？」
「ああ」
そういえばティエリアの姿をまだ見てないと思いつつロックオンの話しを聞く。
「それを俺に頼むか」
「口ではああは言ってるが結構お前のことを気に入ってるんだよ、ティエリアのやつ」
「……まぁ、会うだけなら」
「頼んだぜ」
とてもそうとは思えないが。
俺は不安を抱えつつ、ティエリアの元へ向かった。

「元気がないな」
「……のび太か」
会いにいくと思っていた通りの状態になっていた。
「なんだ、ロックオンに怪我を負わせたことに笑いにきたのか、それともヴェーダに見捨

てられた私を」
「違うよ。ロックオンに見てきてくれって頼まれたのさ」
「ロックオンに……」
　ロックオンの名前を出した瞬間、さらに暗くなるティエリア。
　……まったく。
「そんなに不確かなものより、今しっかりとあるものを見た方がいいと思うぜ」
「あるものだと……」
「仲間とか、そう俺とかな！」
「……」
「そんな顔するなよ」
「はぁ、お前に励まされるとは。しかし礼は言っておこう」
「それはどうも」
　さて、後は本人の問題か。
　俺は少しは立ち直ったであろうティエリアを見るとここから離れ、時を止めてNベースへ向かう。タイムテレビを出して映像を出すとジンクスと戦うトリニティたちの姿があった。
　さて、茶番を始めるか……。

これからやることは彼らを助けて、うまくサーシェスと刹那を戦わせるという流れを作る。
自分で言うのもなんだがこれは秘密道具を使ってもかなり難しいだろう。俺が行った後、サーシェスがどう動くか分からない故に。
それにあの現場は色々な人が見ていたはず。
そして映像を消して目の前を見るとこないだパクったフラッグがあった。
「整備の方は」
「完璧に仕上げておいたぞ。それに性能も少し上げておいた。しかしまったく次から次へと仕事を増やしおって。科学者は私しかいないのだぞ」
「……それはすまなかった」
そして俺の手にはガンダムシリーズで見慣れた白い仮面が握られていた。

時間稼ぎ

次々と襲い掛かってくる追っ手を振り払い、逃げる私たち。正直、こんな生活に私はうんざ利していた。兄妹で幸せに生きる……それで私は満足なのに。

そしてウェーダから指示を受けて待機する私たち。そこに一人の男が現れた。男はアリーアルサーシェスと名乗る。奴はイナクトから降りてくると友好的に接しようとしてくるが、その手には銃が握られていた。そしてそれを構える。

「……嘘」

彼が放った銃弾はミハ兄の胸に向かっていく。

私は呆然とそれを眺め……。

そして何故か私は安全であるガンダムのコクピットの中にいるはずが意識を失った。

止まっていた時間はスローネの爆発、ヨハンとミハエルの血しぶきあげて時間は再び動き出す。無論、一番に反応したのはサーシェスであった。

「なんだ、なにが起こった?.俺が探知できなかっただと!.」

驚くサーシェスに俺はほくそ笑む。

さて、ここまでの流れを簡単に説明しよう。俺はこっそりと時間を止めてトリニティたちがいる場所へ移動。そしてトリニティたちをふえるミラーで増やしそれに置き換える。無論、増やしたダミーの三人は意識を失わせて放置。本物はNベースにこちらも意識を失わせてNベースに放り込んだ。後は時間を動かして島の俺が少し離れたところに陣取り、ダミーのヨハンとミハエル、そしてドライに仕掛けた小型爆弾を狙い撃つ。無論、サーシェスを殺さないように気を配りながらな。監視者のことについては今思えばこの時、アレハンドロはイオリアのもとに出向いていたのでこちらには気づかないはず。

ともかくまぁこんな感じで今に至る。

「ちっ、攻撃がやんでる隙に……」

サーシェスはツヴァイに乗ってここから離脱しようとする。そしてここで逃がしてはいけない。何故ならトランザムを刹那に使わせるためにここでサーシェスと刹那を戦わせなければいけない。出来るだけこの流れは崩したくないからな。

ここで再び時間を止めて森の中に隠し待機させていたフラッグに乗り込む。

初の実戦。正直、不安が一杯だが俺の腕はもう一流の域に達したはずだ。もう、やるしかない。

「さて少しの間、俺と踊って貰うぞ戦争屋!!」
俺は時間を動かし空へフラッグを使って飛び出した。

「なに、敵対反応だ?」
「ふっ……」
俺はリニアライフルでギリギリのところを狙い二発放つ。ツヴァイはそれを避けて距離を保った。当てるつもりはなかったがこれはこれで傷つくな。
「おいおい、一体何者だ?その機体に乗ってるということはユニオンのやつか?」
「……」
オープンチャンネルでこちらに呼び掛けてくるがもちろん反応はしない。声なんて出したらばれちゃうしな。
俺はふと別のモニターに目を移す。そこにはこちらに向かっているエクシアの姿があった。さしずめこちらに着くまで2分というところか。
つまり、このフラッグで2分間、あのツヴァイを足止めしなくてはならない。
「はっ、誰だか知らねぇが邪魔するなら容赦しねぇ!」
「……っ!」

迫りくるツヴァイ。俺は距離をとりながら射撃を続ける。しかし奴はそれをなんなく大剣に弾かれたり、右に旋回し避ける。

「……火力不足か。まぁ、仕留めるつもりはないしこれは都合がいいんだが」

「なれねぇとちと使いづらいが武装さえ分かればなんとかなるもんだぁ！」

一瞬で距離は詰められてツヴァイは大剣をこちらに振るってくる。しかし、ソニックブレイドで真っ正面に受けとめるものなら一刀両断。俺はここで瞬間的に加速させて紙一重で避ける。

しかし、この感じ……。

「ちょこちょことこざかしい！」

「……ははっ」

確信した。俺はこの紙一重の攻防を……

「楽しんでいると!!」

俺は前から思っていたことがあった。のび太は射撃とあやとり以外はからっしき駄目。そう何故、剣も駄目なのかと。射撃も剣も相手に当てるという点では根本的なところは同じ。なら何故にからぶってしまうのか。そもそものび太は目がいい。単なる視力ではなく、動体視力と瞬間視力がだ。のび太はこれを射撃のみなんだと捉えて他に生かすことをしなかった。

例えばこんな風に
「なに！」
「はっ！」
ツヴァイの大剣を使った二撃目の斬り込み。真っ正面では真っ二つになってしまう攻撃も、うまく受け流せればそれは防げる。
俺はそれをやってみせた。
「これで後５０秒」
「やるじゃねぇか！」
しかしツヴァイも止まらない。奴は蹴りをかましえくる。俺はそれをミサイルと入れ換えて装備した煙弾を放ちながら避けた。
「ところがギッチョン！」
「ちっ！」
それでも奴は俺の姿を捉えて近づきあくまで近接戦を仕掛けてくる。しかし、奴がこちらに来た瞬間に目的は達成した。
エクシアがこちらに到着するまで１０秒。それをなしえた。後は離脱するのみ。
「逃げるつもりか？」
「……」

俺は先程よりも威力が高い煙弾を放つ。そしてこのフラッグの気配もこの瞬間に消した。案の定、ツヴァイは立ち止まり、フラッグの気配が消えたことに混乱する。俺は変形して直ぐさまある程度離れたところで気配を再び出し、そのまま離脱。

そしてここでツヴァイのもとにエクシアが到着した。

「お前は！」

「ちっ、クルジスのガキか！」

こうしてエクシアとツヴァイが激突する。そしてエクシアは原作通りにトランザムを発動し、ツヴァイを撃退した。

結成

「ここは……、ミハエル！」
「ミハ兄！」
「あれ、俺はあの男に……」
「目が覚めたようでなによりだ」
「誰だ!?」
　俺は三人の声を聞き、部屋の中に入っていく。気づけばあの森から見知らぬ白い空間にいたとなれば混乱もするだろう。ましてやあの状況ならなおさら。
　俺はとりあえず落ち着くように三人に声をかけた。
「三人ともどこも異常はないかな？」
「あんたは!?」
「あいつを知ってるのか、ネーナ」
「……野比のび太。ソレスタルビーイングにいたやつよ」
「……ソレスタルビーイング。ということはここは」
「いいや、ここはプトレマイオスではないよ。それにソレスタルビーイングとは無関係

だ」
「では、お前は……」
「俺は野比のび太。異世界から来たものさ。どうだいトリニティ、俺のところに来ないか？」
俺は自身のことをおりまぜながらトリニティの三人に話し始めた。

「それは即ち、あなたの仲間になってくれということか？」
「そういうことだ。俺はこの空間であるNベースを拠点に組織で活動をしようと思っている。まだ構成員は二人しかいないし、組織の名前も決めてないがな」
「なるほど。しかし、私たちにはガンダムマイスターとしての役割が」
「……ガンダムマイスターねぇ。とりあえず君たちがなんで襲われたか理解してるかな」
「何？」
「君たちの役目は終わったってことだよ。ヴェーダから用済みとして捨てられたのさ。正確にはヴェーダというよりもバックにいる奴らにね」

「……」

　これに関してはヨハンも心の中で察していたのか特に反論してくることはない。しかし他の二人は違った。

「なんだとぉ！」

「そんなわけ……」

「よせ、二人とも」

「でも！」

「まぁ、そんなわけで勧誘しようと思ったわけだ。どうだい、仲間にならないかい？」

「……」

「こちらに来れば君たちの命は保証しよう。君たちがこの勧誘を断って向こうの世界に戻ればヴェーダだけではなく世界中から狙われていずれ殺されるだけだしな」

「……少し考えさせてほしい」

「了解。答えが出たらその壁にあるボタンで呼んでくれ」

　そして十分後、彼らは俺についてくることに了承した。どうやら彼らの状況とミハエルの命を救ったことが決めてとなったらしい。しかし肝心のミハエルが少し反抗的だ。まぁ、そこを含めて考えはあるのだが。さらにネーナはスイーツのこともちらつかせたおかげでのりのりである。俺は仲間になった三人を連れてある場所へ向かった。

「ここは……」
「ここは演習場である宇宙エリアさ。君たちも自分より弱いやつに仕えるのは嫌だろう。だから模擬戦を行おうじゃないか」
「はっ、面しれぇじゃねぇか」
「だけど私たちの機体は……」
「それなら問題ない。あれを見てほしい」
　俺が視線をずらすとその先には三機のガンダムの姿を現す。その機体を見て彼らは驚きの声を上げた。無理もないそれは向こうにあるはずの彼らの愛機。
「スローネ……だと」
「おいおい……」
「嘘……」
「お前たちにはこの三機に乗って戦ってもらう」
「三対一だと。舐めてるのか!!」
「果たして今の君たちに俺に対してどれだけ通用するのかな」

「いいぜぇ、ぼこぼこにしてやる！」
「ミハエル！」
「やる気満々だな。では三十分後に試合を始める」

そして模擬戦開始の五分前。俺はデュナメスに乗ってスローネたちの前に待機していた。俺の専用機の開発だがやはりというべきかまだ時間が掛かるようだ。作業用ロボットを大量に使っているとはいえ、モビルスーツの作成、改造はとてつもない時間を有するのだ。

目の前の彼らは武装の確認を行っている。そして俺のモビルスーツ登場と同時に驚きの声を上げた。

「あのガンダムは……」
「ソレスタルビーイングの!?」
「ガンダムデュナメス！」
「さて、始めようか。激しい歓迎会を!!」

大きな合図の音が鳴ると同時に俺とトリニティたちとの模擬戦が幕を開けた。

「いくぜぇ。行けよ、ファン……なっ」
「ばればれだよ」
　合図と共にまずスローネツヴァイが俺に向かって先行する。そしてファングを使った瞬間、俺はビームライフルを急所に打ち込んだ。いい忘れていたがこの模擬戦では特殊な武装を使っていて機体に物理的なダメージは入らず、エネルギーを吸収するようになっている。活動不可能になると行動は停止してアナウンスが流れるしくみだ。
　そして俺のビームライフルは当たりどころもありツヴァイを行動停止にさせた。
『ツヴァイ、撃墜』
「ミハエル！」
「ミハ兄！」
「デュナメスと戦うと考えた時、一番厄介なのがツヴァイだからな。それが一番に突っ込んできたのだから当然の末路よ。ファングの使用直後はいい的だ」
「くっ……」
「ヨハン兄！」
「ならば近距離戦で！」

「それはどうかな」
　俺は接近してくる二機のスローネに対してＧＮミサイルを放つ。さらに向こうの動きを予測してＧＮライフルを使ってそこへ狙い撃つ。彼らはデュナメスに近付けない。
「ならば……ネーナ！」
「うん！」
　ここでアインとドライが連結してＧＮメガランチャーを放つ。さしずめ火力でごり押しというところか。
　だが、甘い！
　俺はうまくその射程を計算、そのままギリギリでかわして二機に接近した。
「……っ！」
「嘘！」
「終わりだ」
　近付いた俺はＧＮビームソードを振るい二機を同時に落とした。
『アイン、ドライ撃墜』
　こうして模擬戦はスローネたちの敗北によって幕を閉じた。

「はい、ということでお前たちは弱い」
「くそぉ！」
「くやしぃ」
「……これは？」
「これからのお前たちのスケジュールだ。暫くの間、トリニティは表舞台には立たず、ひたすらに鍛えてもらいたい」
「あのさ、私のスケジュールの土曜日のところ空白になってるんだけど」
「それについては後で説明する」
　この後、Nベースについて軽く説明しながら施設を巡る。途中、教授に会い三人は驚いたが特に執着もないようでそれだけだった。そして俺はメンバーに向かってようやく決めた組織の名前について話す。
「さて、人数もまだ少ないが集まり、名前も考えたので正式に組織を設立しようと思う」
「ほう。どんな名前かね」
「へぇ、私も気になる」
「オーバーワールド。それがこの組織の名前さ」
　こうして俺たち、あらゆる世界をまたに駆けて戦う組織。オーバーワールドが正式に設立した。

ウェイトレス

「いらっしゃいませ！」
「おう、似合ってるぞ。ネーナ」
「あのまかないのスイーツを食べるためとはいえ、どうしてこんなことを……」
　ここは異世界食堂である猫屋。俺はそこに今日も訪れていた。ネーナの性格矯正のひとつとしてここでウェイトレスとして働いてもらうことにした。最初は嫌がっていた彼女だったが店主が作ったまかないのパフェを食べると途端にやるきになる。こうして彼女は土曜日に限り、異世界食堂である猫屋で働くことになった。
「いらっしゃいませ、お好きな席にどうぞ！」
　そして厨房から新しいウェイトレスが顔を出した。彼女はアレッタといってここ最近で働き始めた少女だ。魔族で職がなかったところ、店主に雇って貰ったらしい。
「ありがとう。それと注文はコーヒーにパンケーキを頼む」
「はい、コーヒーとパンケーキですね。かしこまりました」
「私がせっせと働いているなかパンケーキ頼むなんて……いい度胸じゃない」
「夕飯にはまだ早いからな。……そうだ、夕飯時には皆でここに来るぞ」

「兄たちが！」
「ああ。もし良ければその時間に休憩もらうんだな。大丈夫ですか、店主？」
「問題ないぞ」
　店主の声が厨房から聞こえてくる。ネーナは嬉しそうな顔をしながら厨房に戻っていく。アレッタもそのネーナの顔を見て嬉しそうな顔を浮かべながら同じく厨房に戻っていった。
　俺はどこに座ろうかと席を探すと、カウンター席に見知った顔を見つける。俺はその人の隣に座った。
「こんな昼間まからお酒ですか？」
「なに、時間に空きが出来たのでな。もちろん、夜になっても飲むぞ」
　目の前のカウンターに座っているサムライ風の男。名はタツゴロウ、このお店ではテリヤキをよく頼むのでそのままテリヤキと呼ばれていたりする。見た目はだらしないおじさんだが向こうの世界で武名を轟かせる伝説の傭兵である。
　さて、なんで俺がこの人と面識があるのかというと……
「どうだ、最近はみてやれてないが調子は？」
「しっかり言われた通りのことを続けていますよ」
「そうか……」

そう、自身の戦闘力を鍛えてもらっていたのだ。勿論、パイロットの技術ではなく、肉弾戦の方だ。やはり、パイロットの腕だけではなくこういう力も鍛える必要があるからな。

無論、簡単に教えて貰える訳もなく、暫く分のここの食費と土下座を何度も使って師事を得ることが出来た。

「槍の方はどんな感じだ?」

「……まぁ、色々やってます」

タツゴロウ曰く、俺は意外と剣より槍の筋がいいらしい。もちろん弓や銃はぶっちぎりだが。しかし、それは俺というよりのび太の技能だからな何か認められない部分があってな。

それで彼は主に刀を使うので槍のことは基本教えられていないという状態であった。

「なに師を探すのもまた修行よ」

「まぁ頑張ってみます」

今はガンダムＯＯの世界で手一杯だが、落ち着いたらそれ関連で世界を漁ってみようかな。

すると、頼んでいたパンケーキとコーヒーが届く。

……うむ、いい薫りだ。

俺はナイフとフォークを手に取り、パンケーキを適度な大きさに切っていく。そしてシロップをかけてそれを口に運んだ。口の中にシロップ特有の甘さと柔らかいパンケーキの食感が調和する。

「うまい！」

「お主は色々なものを食べるのう」

「ここの料理が全て上手いのがいけないんだ」

俺は次々とパンケーキを口に運んでいき、食べ終わるとコーヒーを静かに飲み干した。

まぁ、このお店のお客との交友関係といえば始めて赤の女王に目を付けられ死ぬかと思ったが今では加護まで付けてくれるくらい仲が良くなっている。後、目立って仲が良いのは魔術について教えてくれるヴィクトリアとかかな。最初はアルトリウスから聞こうと思ったのだが、彼女を紹介されうまく流されてしまった。まぁそんな経緯でヴィクトリアとは仲が良い。

「カツ丼を頼む！」

……さて、人も増えてきたしそろそろ出ようかね。

俺は立ち上がり厨房の方、タツゴロウに声を掛けた。

「また、夜に来ようと思います。ネーナよ、精々気張って働け。タツゴロウもまた夜に」

「むかつく！」
「おう」
俺は笑いながら猫屋をあとにした。

出撃

「のび太、そっちの機材を頼む。敵さんに見つかる前にとっとと終わらせるぞ」
「ほいっす」
　トランザムシステムが発動し、世界はまた一歩動き出したのにも関わらず、俺はいつものように機体の整備を手伝っていた。この機体の整理もよく機体のことについて知ることも出来るので決して無駄なことではない。とっとと無双したいなんて考えてないからな。
　まぁ、ということで俺は刹那より一足先にトレミーに戻っていた。機長室では今頃、スメラギさんや刹那以外のマイスターがトランザムや今後の対応を話し合っている。
「のび太、お疲れ。はい、これ差し入れ」
「クリスか。おっ、ありがとよ」
　俺は投げられた缶をキャッチする。ちょうど喉が乾いていたのでありがたい。
「のび太はどう思う。イオリア・シュヘンベルグのこと?」
「あの人は考えてたんだと思うよ。こういう事態が起こるのも」
「それって」

「ガンダムが……というより疑似ＧＮドライブが敵として現れるという事態さ。俺はそれが理由でトランザムシステムがあると踏んでいる」

まぁ、この先の対話で必要というのが重要なんだが。それは今は言えない。

「私たちのやってきたことは無駄じゃないよね」

「……無駄じゃないさ。俺らがやってきたことは確かにいい影響も与えている。これからも変わらない」

「そうよね……」

すると、クリスの通信機から音が鳴る。どうやらスメラギさんから操縦室に召集命令が来たようだ。さらに俺の方にも連絡が来て今回は先にガンダムの整備の方を優先してほしいそうだ。

……ついに来たか。

俺は正直ここで大きく干渉するか、しないか迷っていた。

時間をたんまウォッチで止めて救出を考えていたが、今回の戦いは一期の終盤でありピンチになるのはロックオンだけではない。トレミーもまた危機に陥る。もちろんこちらも阻止する予定だが……。しかしトレミーの方は中の人は数十人は下らないし、連続で追撃さへるためたんまウォッチで止めてどうなる問題ではない。俺の直接の介入は不可欠だろう。

さらに介入方法はどうであれ、死ぬべき人が生きることからこの戦いの後の状況が原作から大きく離れることは確実。なら俺は変に目を付けられたりするくらいなら堂々と介入すべきだと思ったのだ。

……つまり、時は来たということ。

さらに俺自身、というより今まで触れることもなかったので説明がなかったが秘密道具についてある問題があったのだ。俺は数々の秘密道具を持っているが一つだけ持っていないものがあった。

タイムマシン

理由は簡単でドラえもんが未来に行っている時に俺がこの世界やNベースへ跳んだからだ。故に俺は過去や未来に跳ぶことが出来ない。あるいはもしもボックスを使い手元にタイムマシンを戻そうと思ったがふと思った。タイムマシンを手元に無から生み出されたとすればいいが、ドラえもんが未来に行かずスペアポケットに入っていた状態になったらどうなるかと。その場合、俺が進めたこと全てが変わる可能性があると思ったのだ。これに気付いたのはソレスタルビーイングで活動を始めた後だった。これを知ったときはひどく落ち込んだものだ。

そして死をなかったことにする方法は俺が介入して回りにばれないように死を回避するのと違い大きなリスクがある。例えばもしもボックスなどを使い過去を改変した

場合、使用前の俺にはその後の変化を明確に理解することが出来ないのだ。それ故に俺はこの方法を使うのを躊躇った。

　他にも改変系の秘密道具があるがあれは俺にも予想出来ないリスクがある可能性があるので保留にしてある。つまり俺はこの戦いでどんな結果が出ても過去改変はするつもりはなく、チャンスも一回ということだ。今回は見ず知らずの人間ではない、長く時を共にしてきた仲間だ。腕に力が入るのが分かる。

　……よし！

　方針を決めた俺は整備の手伝いを終えると、たんまウォッチで時間を止めてNベースに連絡を入れる。

「教授、機体の準備をお願いします。また以前のフラッグを」

『のび太か。その必用はない』

「その必用はない？……まさか」

『丁度こちらから連絡を入れるつもりだったのだ。君の専用機が完成した。動作、性能の確認は済んでいる』

「さすがです教授。ではトリニティにも伝言も頼みます」

『了解した』

連絡を終えた俺はさっそく速足で動き出す。俺の存在をおおっぴらにする以上、出来ることは精一杯やっておこう。俺は操縦室に行く前にタイムふろしきを握りしめながらある場所へ向かった。

「連合の艦隊がトレミーに接近中。その数、疑似ＧＮドライブ搭載型が２５０機以上。……例のツヴァイの姿もあります」
「出撃できるのはヴァーチェとキュリオスだけね」
「二機だけでこの数を……」
「作戦は考えてある。乗り切るわよ」
『俺も行かせてくれ、Ｍｓ，スメラギ』
「その体で何を言ってるの。今回は休んでなさい」
『くそっ！』
ロックオンの悔しそうな声が響き渡る。そんな中、二機のガンダムが出撃した。
状況はさすがにこちらの劣勢。アレルヤは同じ超兵であるソーマ・ピーリスと戦闘で気を取られ、ティエリアとトレミーが完全に防御に回っている。

「スメラギさん。艦の制御にのび太を召集しましょう。正直、手が足りません」
「クリス、どう?」
「それが繋がらないの。整備の方はもう大丈夫だと思うんだけど」
「……仕方ないわ。今はこの体制で乗り切りましょう。のび太には私からもメッセージを送っておくわ」
　そんな状況が続き、かかるはずのない場所から連絡が入る。そこはデュナメスが保管されているハッチからだった。
『ロックオン・ストラトス。出撃するぞ!』
「ロックオン、どうして!?」
　映し出された映像はデュナメスのコクピットの中のものだった。この時、慌てていたせいかロックオンの眼帯が外れていたことに気付く者はいなかった。……ただ、一人を除いて。
『大丈夫だよスメラギさん。あんたの作戦通りに動くだけさ。それに目も体の方も問題ない』
「……分かったわ。しかし、無理はしないこと。いいわね?」
『ＯＫ』
「スメラギさん、ロックオンの眼帯が……」

「……えっ、そういえば」

こうしてデュナメスは出撃し、ＧＮライフルで出撃と同時にジンクスの数機を打ち落とす。誰から見てもそれはとても片目の視力が無いものの射撃には見えなかった。